菊池一族解體新章

巻ノ四

菊池市教育委員会
菊池文化研究所

序　　文

菊池一族は、平安時代の後半から戦国時代の頃（1070 年～ 1532 年）まで約 450 年もの間、菊池地域を拠点に栄えた武士団で、最盛期には九州一円に影響力を及ぼすほどの勢力を誇っていました。

菊池市教育委員会では、菊池一族をはじめとする菊池の歴史・風土・文化を後世に引き継ぐために調査・研究し、その成果を広く市民に還元し、学習活動にも反映することを目的に令和元年度に菊池文化研究所を設置しました。

その取り組みのひとつとして、菊池一族に関する研究の深化・蓄積と、菊池一族に関連する分野に携わる若手研究者を広く支援するため、菊池一族に関連する歴史・文化の調査研究事業を行っています。

この度、令和 4 年度の調査・研究の成果を「菊池一族解體新章　巻ノ四」として刊行しました。

この論文集が中世歴史文化の研究を深化させる一助になれば幸いです。

おわりに、この事業の実施にあたり、論文の選考並びに研究の指導・助言をいただいた先生方並びにご理解とご協力をいただいた関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

令和 6 年 11 月

菊池市教育委員会　教育長
音光寺　以章

例　言

1　本書は、菊池文化研究所が令和4年度に公募した「菊池の歴史・文化の調査研究事業」により、選考された研究者による調査研究論文を収録したものである。

2　本書の作成にあたり、服部英雄氏、稲葉継陽氏には、研究者の選考及び調査における指導において、ご尽力を賜りましたこと厚く御礼申し上げる。

3　本書の作成にあたり、掲載資料の提供などで多くの機関並びに個人に御協力をいただいた。掲載した資料の出典については各章末論文ごとに記した。

目　次

第１章　『太平記』で菊池一族が描かれる場面を国語科および他教科との関連を生かした郷土の教材として扱うことに関する一考察

神奈川大学　国際日本学部

矢崎 佐和子　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

第２章　菊鹿型宝篋印塔の誕生と展開

太宰府市教育委員会　文化財課

髙橋 学　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21

『太平記』で菊池一族が描かれる場面を国語科および他教科との関連を生かした郷土の教材として扱うことに関する一考察

矢崎　佐和子

はじめに（前提として）

ある特定の作品を国語科の古典の教材として扱おうとした時に、その作品が教科書で収録されているかという点が最大のポイントでとなる。さらには、扱いたい作品の収録されている教科書が学校で採択されるかということと、授業で扱われる教材となるかということなど、いくつものハードルが存在するであろうことが予想される。

多くの生徒や学校関係者が受験科目としての古典を重要視する中で、最近では古典を受験で課さない大学も増えている。そのため、できれば他教科や国語でも現代文に時間をあてたいという現場では、古典の授業時間を減らそうという動きはあっても、増やそうということがほぼないというのは、筆者の実体験でもある。

そうした現状において、教科書での収録もほとんどなく、ましてや『平家物語』という定番教材がすでに存在する軍記物語において、『太平記』で菊池一族が描かれている場面を取り上げることがまず可能であるのか。結論から先に述べると、受験科目としての古典という枠を外して、『太平記』の菊池一族で教材を作成することには、こと菊池市においては大きな可能性があると考えている。

本論考では、学習指導要領や国語科が目指すところを確認し、『太平記』の菊池一族が登場・活躍する場面がそれらに適合するのか、するのであればどのような指導ができるのかを、高等学校における指導を想定して検討を行う。もちろん、本論考はひとつの提案であり、また、地元の出身あるいは生活者ではない人間の視点ゆえの、発見と見落としの両者が存在しているに違いない。したがって、本論考の役割は、古典文学作品が郷土資料として生かされ、地域にふさわしい教育や指導法が現場で創意工夫されるきっかけにあると位置付けている。

学習指導要領の確認

新しい学習指導要領（平成二九・三〇・三一年改訂）では、平成二一年三月に告示されたこれまでの学習指導要領における「国語総合」（標準単位数4）で扱われていた古典の内容が「言語文化」（同2）という科目の設定に変わり、また、これまでの「古典A」（同2）と「古典B」（同4）が「古典探究」（同4）の一科目の設定へと変わった。

指導要領の「言語文化」や「古典探究」では、どのようなことが目標として設定されているのだろうか。「高等学校学習指導要領改

訂のポイント」で、本論考の趣旨と関係があると思われる項目を確認してみたい。

「教育内容の主な改善事項」として、「言語能力の確実な育成」「理数教育の充実」「伝統や文化に関する教育の充実」「道徳教育の充実」「外国語教育の充実」「職業教育の充実」が掲げられている。この内の「伝統や文化に関する教育の充実」について、さらに詳しく見てみたい。

・我が国の言語文化に対する理解を深める学習の充実（国語「言語文化」「文学国語」「古典探究」）
・政治や経済、社会の変化との関係に着目した我が国の文化の特色（地理歴史）、我が国の先人の取組や知恵（公民）、武道の充実（保健体育）、和食、和服及び和室など、日本の伝統的な生活文化の継承・創造に関する内容の充実（家庭）

新学習指導要領では、教育内容の改善事項の第一に「言語能力の確実な育成」が示されている。そこでは「国語」の各科目の特性に応じた語彙、思考、表現の力の育成とともに、「各教科等」での「言語活動（自らの考えを表現して議論すること、観察や調査などの過程と結果を整理し報告書にまとめることなど）の充実」が求められており、古典文学作品を起点として他教科での言語活動的な学び、体験的な学びへとつなげることには、積極的な意味を見出すことができそうである。

地域の伝統や文化を扱った教材

次に、古典文学作品を地域の伝統や文化を学ぶために活用する際に必要なことについて確認してみたい。

高橋邦伯氏は、伝統的な言語文化に親しむ単元開発の視点として、「過去の言葉や文化が現在に生きる意味を探ろうとする姿勢」と「現在に生かせることはないかという探究的な課題解決への意欲」、「教師の一個人としての作品への意味創出」（作品研究と教材研究）、「『わからないことは何か』を追求していく学習活動」（「情報」の観点からの学習活動）といった点を提示し、最後に「地域教材の開発単元」を指摘する[1]。

伝統的な言語文化の単元開発にとって忘れてはならないのが地域教材である。どの地方にも地域の伝承や古人が歩いた軌跡が存在する。その存在を学習活動に結び付けることも忘れてはならない。学習活動に結び付けるのは、教師の意思であり、作品・地域研究と教材研究の深さだ。未来への伝統文化を継承する担い手の学びを創っていきたい。

実際に古典文学作品を地域教材として扱った例としては、千葉県の中学校において、『南総里見八犬伝』や『古事記』『日本書紀』の「弟橘媛の伝説」（「ヤマトタケルの東征」）をはじめとした、地域の伝統的な言語文化をいくつも教材化したものがある。現在も「社会や文化の中で古典がどのような役割を果たしてきたのか考えたり、継承する意味や古典を学習する意味を見いだしたりすること」につ

ながる単元の構築が継続されている(2)。

また、九州においては、宮崎県での短歌による取り組みに注目したい。宮崎県生まれの歌人・若山牧水の名を冠した、高校生を対象とした「牧水短歌甲子園」が二〇一一年より開催され、俵万智氏の宮崎移住でその熱は高まりを見せているという。「短歌県づくり」は知事の公約にも掲げられ(3)、各校種で短歌に関わる授業の実践や地域と連携した行事への参加などへの模索が続けられている。

その中には、宮崎県立宮崎海洋高等学校における長期乗船実習と国語科の授業を組み合わせ、和歌の創作を通じて「自己との対話」「他者との交流」を目指すという、意欲的かつ創造的な授業実践も存在した(4)。

管見の限り、地域に関わりのある歴史上の人物や伝統芸能にちなんだ地域教材の事例は全国的に数多く存在したものの、短歌・俳句以外の古典文学作品を取り扱う事例、高等学校での事例については、これ以上のものを見つけることができなかった。

しかしながら、古典文学作品と地域の伝統や文化を結び付けること、『太平記』における菊池一族をテーマとした教材開発をすることは、その意義や方法について十分に検討することにより可能であるという結論に至った。検討の過程について、以下に詳述する。

国語（古典文学）教材としての『太平記』

『太平記』を収録する現行の教科書の確認

今度は、現行の高等学校の教科書に目を移し、『太平記』の収録があるのか、また、収録されている場合にはどのような場面に対してどのような目的が置かれているのかについて確認してみたい。

現行の教科書において『太平記』本文の収録は二つ、異なる科目の異なる教科書会社でなされており、ひとつは旧指導要領における科目、もうひとつは新指導要領における科目であった。以下、その概要をまとめ、指導上のねらいについては必要に応じてそのまま引用する。

①『古典A』（東京書籍）

「俊基朝臣海道下り」（としもとあつそんかいどうくだ）

『太平記』巻第二で、後醍醐天皇の寵臣である日野俊基が幕府方に捕らえられて、京都より鎌倉へと連れられて行く「道行文」である。

「学習の手引き」として、「①この文章の特徴を指摘せよ。②俊基の心情はどのように描かれているか、段落ごとにまとめよ。」とある。さらに、「俊基朝臣海道下り」の本文のあとに、「言語活動」のページが付されており、「道行文（みちゆきぶん）の朗読」として、道行文の特徴や簡潔にまとめた文学史の説明が付されている。そしてその最後に、「以上のことをふまえながら、改めて『太平記』「俊基朝臣海道下り」を朗読しよう。」という「課題」が示されている。

古典Aは、旧学習指導要領で設定されている科目であり、筆者もこの東京書籍の教科書を使用した。古典Aの教科書には古典Bに比して、古文・漢文ともにバリエーションに富んだ作品が収録されているというのが使用してみての印象であった(5)。

だが、古典Aというのは、生徒が古典での大学入試を想定している学校やカリキュラム内では、あまり採用しない科目であると考えられる。私のかつての勤務校で古典Aを採用していた理由は明白で

ある。理工学系大学附属高校（当時は男子校）で、内部進学を目指すコースを選択した生徒たちのクラスであり、受験で古典を使用する必要のないためであった（文系科目での一般受験を行うクラスでは古典が必須であり、古典Bが設定されていた）。それゆえ、学校側より指導項目・内容に関する厳しい指定はなかったものの、生徒の興味関心や実力を見て、「俊基朝臣海道下り」での指導は行わなかった。

また、この教科書で「俊基朝臣海道下り」は、「古文編」が「1物語」「2歴史」「3評論・随筆」と分類されている中の「2歴史」の中に配され、『平家物語』の「海道下り」や『曽根崎心中』の心中場面と並ぶ「道行文」の具体的例として取り上げられ、朗読の「言語活動」が推奨されていたことを再確認したい。つまり、軍記物語の定番作品において主となるテーマを扱った教材ではないということには留意しなければならない。

もちろん、全四十巻の『太平記』には、単純に「軍記」や「物語」には分類できないテーマとその本文が無数に存在するのではあるが、「道行文」が作品全体で何度も登場するものではないのも事実である。すると、次に確認するべきは、「軍記物語」として『太平記』を採用している教科書の存在である。

先述の通り、古典Aの教科書は今年度で役目を終えるが、新指導要領対応の古典探究では、「千早城の戦い」の一場面が採用されていた。

②『古典探究・古文編』（筑摩書房）

「千早（ちはや）城の戦い」

『太平記』巻第七での、河内国千早城における楠木軍と幕府軍との戦いの場面である。あらすじとしては、正成の奇策で惨敗を重ねた幕府軍が兵糧攻めをとり、長崎四郎左衛門尉（長崎高貞）と工藤二郎左衛門尉（工藤高景）が連歌を始め、所々で囲碁やすごろく、闘茶や歌合が始まる。それを見た正成が、藁屑で作った等身大の人形を用いて幕府軍を欺き、大打撃を与えたというものだ。

教科書が設定する指導の方向性であるが、冒頭では「視点」として、「『平家物語』とは異なる合戦の書き方に注目しよう。」とある。教材の最後には「理解」と「表現」として、次のようにある（以下、本論考においては教科書掲載の箇所〈ページ・行等〉の記載については省略する）。

理解―(1)長崎四郎左衛門尉と工藤二郎左衛門尉の発句と脇の句が「禁忌なりける表事かな。」と評されたのはなぜか、説明しなさい。

(2)楠木正成の作戦とその結果をまとめなさい。

表現―(1)『平家物語』「能登殿の最期」と比較して、合戦の描き方の違いを、四〇〇字程度でまとめなさい。

また、ここに至るまでに、脚注において、「1「さきかけてかつ色みせよ山桜」の句の掛詞を指摘し、現代語に訳しなさい。」として、長崎と工藤の詠んだ連歌の修辞を押さえた上で現代語訳を試みる手引きがなされている。

なお、『太平記』「千早城の戦い」は、この教科書において第二部の「第7章　歴史を語る―物語（三）」の最後に配置されている。

第7章の構成と目標は以下の通りである。

大鏡（一）　雲林院にて（序）
　花山院の出家（花山院）
　公任、三船の誉れ（頼忠）
　南の院の競射（道長上）
平家物語　忠度の都落ち（巻第七）
　能登殿の最期（巻第一一）
太平記　千早城の戦い（巻第七）

▼目標…歴史的な事実と比較しながら、物語を解釈する

歴史物語や軍記物語は、歴史上の出来事を踏まえて書かれた物語である。歴史的な事実と比較しながら、どのような点に作品の特徴があるのか考えてみよう。

言語文化と古典探究の教科書を概観して、定番教材の大幅な異動というのはないとみられるが、新指導要領における改定の趣旨や科目の目指すところに沿って(6)、伝統的な言語文化に対する理解や探究的な言語活動が意識され、入れ替えや新規での採用があると考えられる。そう捉えた際に、『太平記』「千早城の戦い」において意識されているであろう点をまとめてみたい。

ひとつは、楠木正成という時代を代表する人物のとった作戦を古文で理解することである。ふたつめは、軍記物語の定番教材である『平家物語』との比較と、その比較を通じて時代の変化を理解し、その中で正成の作戦を評価することである。最後に、物語と関連付けた解釈や現代語訳によって連歌という文芸（多様な言語文化の一つ）を理解することだ。

これらは、『太平記』における菊池一族を教材として扱い、単元を作成するにあたって欠かせない要素として念頭に置いておきたい。

軍記物語の基礎事項という視点から

ここまで、『太平記』に焦点を絞り、作品を採用している教科書でのテーマや指導のねらいについての確認を行った。しかし、用例としては少ないため、他の軍記物語でも同様の手続きを行うこととした。

令和四年から適用されている言語文化の教科書を用い、多くの教科書でほぼ定番教材として採用されている『平家物語』を参考とする。言語文化は共通必履修科目であり、そこで求められる様々な要素を教材としての軍記物語の基礎事項とみなしたい。よって、次の教科書を取り上げて検討してみたいと思う。

①『精選言語文化』（東京書籍）

「木曽（きそ）の最期」（京から近江の勢田に落ち、粟津での戦死まで。義仲と兼平、義仲と巴とのやり取りがある。）

学習の手引き

1 義仲と兼平が最期を遂げるまでの戦いの推移をたどりながら、この文章を音読しよう。

2 義仲は巴に、「おのれは疾う疾う、女なれば、いづちへも行け。」と言っているが、その時の二人の心情を考えよう。

3 兼平が、最初、「御身もいまだ疲れさせ給はず。」と言いながら、後に「御身は疲れさせ給ひて候ふ。」と言ったのはなぜか。

4 「さばかり日本国に聞こえさせ給ひつる木曽殿をば、…」と、「この日ごろ日本国に聞こえさせ給ひつる木曽殿をば、…」とでは類似した表現が繰り返されているが、それによりどのような効果が表れているか。

5 義仲と兼平の心情に触れながら、それぞれの死の描かれ方についてまとめよう。

語句と表現

1 次の傍線部について、そこに用いられている音便の種類と、もとの形を確かめよう。

1 主従、駒を速めて寄り合うたり。

2 きはめて太うたくましいに

3 我討つ取らんとぞ進みける。

2 「木曽三百余騎…」から「…主従二騎になつてのたまひけるは」の部分には数字が多用されているが、それはどのような効果をねらったものか。

この後、「参考」として『平家物語』の冒頭が示される。「言語活動」については、写真も用いて、「受け継がれる『平家物語』」と題して三ページを使って解説が付されている。能、浄瑠璃・歌舞伎、小説などの「『平家物語』を素材とした主な作品」も一覧で示され、最後には次のような「課題」が与えられている。

●『平家物語』を素材とした作品を、『平家物語』本文と読み比べよう。

1 登場人物や場面設定、あらすじなどについて、『平家物語』本文と同じ点や違う点を述べよう。

2 それぞれの作品がどのような工夫によって新たな展開をさせているのか、調べたことや考えたことを発表し、意見や感想を述べ合おう。

以上から、言語文化の段階で、『平家物語』を教材とした軍記物語の学習で求められているであろうことをまとめてみたい。

内容の面では、武士主従の心情、武士の誇りや生き様（死に様）について、それを効果的に伝えるための繰り返しや数字による強調表現に注意しながら、本文に即した理解が期待されている。文法事項では、主従関係を理解した上での敬語や音便形を学ぶ。また、内容の理解にともなう音読の深化や、『平家物語』の多様な享受のされ方を調査して発展的に作品を解釈・鑑賞するという、探究的な言語活動までをも見据えたものとなっていることがわかった。

複数テキスト（比べ読み）の視点から

前項で取り上げたのとは別の言語文化の教科書を起点として、教材としての『平家物語』についてさらに考察を加えようと思う。

①作品について書かれた評論の視点を加える

筑摩書房の『言語文化』では、「第5章　転換期の文体と行動　軍記を読む」として、『平家物語』の「木曽の最期」（義仲の装束の描写から始まる）と兵藤裕己氏の文章を収録している。以下、単元を詳細に確認してみたい。

単元の目標…語りの文体が表す臨場感に触れる

歴史が大きく動くとき、人々の思考や行動、また言語表現も大きく変化する。平安時代から鎌倉時代にかけて、貴族の衰退と武家の興隆という歴史の転換期の中に描かれた「軍記」を通して、古典表現に対するものの見方、考え方の幅を広げたい。

また、和漢混交文という文体の独特のリズムや特徴的な表現が、戦の緊迫した描写にどのような印象をもたらすか考え、人物がいかなる心情や判断に基づき、行動を選び取ったか読み解こう。

単元の構成は次の通りである。

平家物語　木曽の最期
古典文法の窓7　敬語法
転換期の文学――『平家物語』の魅力　兵藤裕己
和漢混交文と漢字仮名交じり文
【実践】体験を通して古典文化の理解を深めよう

教科書が設定する指導の方向性であるが、冒頭では「視点」として、「軍記物語の表現の特質に留意しながら、登場人物の行動と心情を読み取ろう。」とある。教材の最後には「理解」と「表現」として、次のようにある。

理解―(1)義仲と巴、義仲と兼平との心の通い合いはどのように描かれているか、それぞれ叙述をふまえて具体的にまとめなさい。

(2)義仲の死がどのようなものとして描かれているか、兼平の死と比べて考えなさい。

表現―(1)冒頭の八行「木曽左馬頭……をめいて駆く。」から、動詞・形容詞の音便形を抜き出して、その種類ともとの形を確かめなさい。

(2)「御身も……御自害候へ。」の今井四郎の会話から敬語を抜き出して、その用法を確かめなさい。

また、ここに至るまでに、脚注において、「1「義仲の「装束」の特徴は何か。」「2「主従五騎」とは、誰のことか。」「3「いかにもなる」とは、どのようになることか。」「4前の発言「御身もいまだ疲れさせたまはず。」とあわせて、兼平の真意は何か、考えてみよう。」として、本文の流れに従って「理解」を助ける手引きがなされている。

「古典文法の窓7　敬語法」では、《敬語の種類》、《敬意を表す語を付加する》（助動詞・補助動詞・接頭語・接尾語）、《敬意を表す動詞を用いる》（敬語動詞）といった敬語の基礎の説明（「主な敬語動詞」の一覧表あり）が施されている。

ここまでを振り返ってみると、内容の面では、武士主従の心情、武士の誇りや生き様（死に様）について理解する点において、本論考の前項で確認したところと変わらないのがわかった。また、この教科書で「表現」(1)(2)として扱っているのは文法事項であり、本教材で敬語や音便形を学ばせる意図であるのも変わらない。

だが、表現の面では、義仲の装束の描写に注目させている点が目

に留まった。これはおそらく、「語りの文体が表す臨場感に触れる」という単元の目標を意識したものではないかと考えている。そのことについて少し分析してみたい。

本項の冒頭でも示した通り、「木曽の最期」の本文と、続く「古典文法の窓7　敬語法」のあとに、兵藤氏の文章が続き、その直後には、和漢混交文と漢字仮名交じり文のそれぞれの特徴と成立の説明が掲載されている。

兵藤氏の「転換期の文学」の主題は、「平家一門の急速な没落を、それの拠(よ)って立つ日常の秩序や価値観の地崩れ的な崩壊として表現できたところに、そこに語られる時代を超える危機の深さ」があるとし、そのことは、「因果論や勧善懲悪のつじつまあわせ」以前に「文章のリズム、または文体の速度といったレベル」で実感されるというものである。この兵藤氏の文章には「理解」として、以下のような課題が設定されている。

理解―(1)『平家物語』の序章「祇園精舎」には、どのような思想が読み取れると筆者は述べているか、整理しなさい。
(2)『平家物語』の「木曽の最期」やその他の巻を読んで、「文章のリズム」や「文体の速度」について、どのような印象を持つか、自由に話し合いなさい。
(3)現代の社会で起きている「私たちの日常的な秩序感覚を反転させてしまう」ような出来事の例を挙げて、木曽義仲や義経の滅亡を語る『平家物語』との共通点を考えなさい。

「読む」ことによって、古典文学作品が持つ主題が現代にも通じる点があることを感覚的に呼び起こさせ、生徒の探究心に訴えかける仕掛という印象を受けた。

さらに、単元の最後には、「読む」ことの「実践」として、「当時の人々がどのように物語を味わったのか、追体験してみよう」として、「レッスン」という項目を立て、次の三点を提示している。

「語り」を体験する
①『平家物語』「那須与一」の「語り」を、インターネットや図書館などで探し、聴いてみよう。
②文字で書かれた物語と比べ、曲に乗せた「語り」は作品の印象がどう異なるか、数人のグループに分かれて各自の考えを話し合ってみよう。
③「木曽の最期」を、場面を想像しながら朗読してみよう。グループ内で、地の文と、源義仲・巴・今井兼平ら登場人物の担当を決め、読んでみよう。終わったら担当を替えてもう一度朗読し、黙読や自分だけの音読との印象の違いなど、気づいたことを話し合おう。

さらにアドバイスとして、「琵琶(びわ)法師」を調べてみることや、「リズムや語り手の表情」の工夫、語り手と聴き手の「場の共有」の効果を考えたうえで、自分たちの朗読に生かしてみることが示唆されている(7)。

以上、新学習指導要領の中で共通必履修科目とされる言語文化の教科書においては、作品について書かれた評論の読み比べを通して

現代の課題にも気づかせるという探究的な取り組みや、その成果を言語活動としての朗読の工夫に生かすといった取り組みもなされていることがわかった。

②異なるジャンルの作品の視点を加える

多くの古典Bの教科書では、『平家物語』と『建礼門院右京大夫集』の二作品を収録している(8)。両者を関連付けた授業を想定しているためと考えられる。後者は日記文学（私歌集）という、『平家物語』とは異なるジャンルの文学であり、女性作者という目線では、同時代の同事件や同人物たちはどう見られ、表現されているのかという点から、探究的な言語活動につなげていくことができるであろう。

また、『高等学校　改訂版　古典B』（第一学習社）では、鎌倉時代に成立した歴史物語『増鏡』より「後鳥羽院」および「時頼と時宗」という題で、興味深い二編を収録している。

敗者の心情は『平家物語』の木曽義仲の最期はもちろんのこと、古典Bで多く取り上げられている平忠度の都落ち、壇ノ浦の戦いでも知ることができるが、同じ敗者でも政争に敗れて遠島となった帝の生活と心情は、また異なる視点での気づきが生ずるはずだ。一方、かつて先祖が数多の戦いを勝ち抜いて為政者となった北条氏が示した徳や志は、戦うだけでない武士の姿であり、また、勝者となった者たちのその後のひとつのあり方が描かれている。

物事を様々な面からとらえるための教材の配置となっているのではなかろうか。

他教科との連携を考えるために

新学習指導要領総則では、「カリキュラム・マネジメントの実現に資する」ために、構成の大幅な見直しがなされた。その中には教育課程の編成が含まれ、「各学校の教育目標と教育課程の編成」（第1章総則第2款1）とともに「教科等横断的な視点に立った資質・能力の育成」が新しく加えられている(同2)。つまりは、「言語能力、情報活用能力、問題発見・解決能力等の学習の基盤となる資質・能力や、現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力」および「豊かな人生の実現や災害等を乗り越えて次代の社会を形成することに向けた現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力」が育成されるための「各教科・科目等の特質」「各学校の特色」を生かした教育課程編成が求められている（「解説 総則編」）。

もちろん、これまでも個々の地域や学校において、「教科等横断的な視点に立った」取り組みや授業というものは存在したはずであるが、「豊かな創造性を備え持続可能な社会の創り手となることが期待される生徒に、生きる力を育むことを目指す」（第1章総則第1款3）という指導要領の今回の改定での基本的な考え方に則るものであることが肝要である。なお、どのように国語科の古典文学作品の教材に対して他教科との関連性を見出していくかについては、後に検討したい。

『太平記』菊池一族の場面の確認

ここまで、新学習指導要領の焦点、そして、現行の高等学校の言

語文化や古典探究の教科書における『太平記』と『平家物語』（軍記物語）や歴史物語等での学習のねらいを確認してきた。それらに照らして、『太平記』における菊池一族の登場・活躍する本文は、教材としての使用に十分値するものと考えている。

以下、『太平記』における、菊池一族の登場・活躍する場面について、巻を追って確認してみたい。なお、テキストには兵藤裕己校注の岩波文庫『太平記』（全六巻）を使用した。

また、場面ごとにA～Gの見出しを付したが、それぞれ概要を示し、国語科の古典文学作品の教材として学習すべき内容や表現、文法事項などが含まれているのかを確認してみたい（以下、本論考では各場面についてA～Gの記号を用いて示す）。

A　巻第十一「筑紫合戦九州探題の事」

元弘三年（一三三三）三月十三日、菊池武時（菊池入道寂阿）が少弐貞経（少弐入道妙恵）・大友貞宗（大友入道愚鑑）の裏切りにより鎮西探題で討死する。

・武時が、櫛田宮で不思議な出来事を体験する〔敬語→神に対しての敬意の表現〕

・武時とその子・武重の別れ〔和歌→妻子との永遠の別れ・父の覚悟〕

・情勢が変化して最終的に探題を攻め滅ぼした少弐・大友

B　巻第十四「節刀使下向の事」から「官軍箱根を引き退く事」

建武二年（一三三五）十二月、後醍醐天皇に叛旗を翻した足利尊氏を討つべく宣旨を賜った新田義貞に菊池武重（菊池肥後守）が加勢し善戦するも、竹ノ下で官軍は敗北する。

・武重が箱根にて先駆けをし、三千騎を峰に追い上げる　※菊池千本槍（槍衾）

・大友と塩冶の寝返りのため官軍は総崩れとなるが、武重は三百余騎を率いて現れ、西へと敗走する義貞らと合流する

C　巻第十五「少弐と菊池と合戦の事」から「多々良浜合戦の事」

建武三年（一三三六）二月・三月、京より九州に落ちた足利尊氏に加勢した少弐貞経が、菊池武俊〔＝武敏〕（武重の弟）に攻められ、婿の原田の心変わりにより内山城にて討死する。菊池の多勢に対して小勢の尊氏は自害まで考えたが、奇跡的に勝利を得る。

・貞経の末子の宗応蔵主が父の火葬の火に飛び込んで後を追う〔漢詩の辞世→父を亡くした子の悲しみ・激情〕

・足利尊氏の強運〔奇跡的な勝利の要因〕

D　巻第十六「新田義貞進発の事」から「正成討死の事」

建武三年（一三三六）五月、九州より東上した足利尊氏追討のため新田義貞が進軍する。義貞率いる官軍には菊池武重と一族も加わるが、義貞軍は西国での戦いに敗れる。後醍醐天皇に召された楠木正成も死を覚悟して兵庫での戦いに加わる。

・兄・武重の使いとして楠木正成の様子を見に行った菊池武吉が、正成ら一族とともに自害を遂げる　※湊川の戦い

E　巻第三十三「細川式部大輔霊死の事」と「菊池軍の事」（筑後川の戦いを含む部分）

延文四年（一三五九）八月十六日から十七日、懐良親王（征西将

軍宮）を大将とした菊池武光（菊池肥後守）とその一族は新田一族らとともに、筑後川で足利将軍方の少弐頼尚（太宰少弐）の軍勢と激突する。　※筑後川の戦い

・延文三年六月（史実では四年四月）、足利尊氏の死を受けて京に攻め上ろうとする武光の討伐のため下向した細川繁氏（細川式部大輔）が怪死

・十一月、武光が畠山直顕（畠山治部大輔）討伐に向った際、機を見て敵となった大友らに退路を断たれたことに全く動じることもなく、翌年三月、武光は直顕の子・重隆（民部少輔）が籠る三俣城を落とす

・宮方となっていた少弐頼尚（太宰少弐）と阿蘇惟村（阿蘇大宮司）が手のひらを返すも武光は惟村を打ち破り、七月、懐良親王を大将として大宰府の頼尚討伐へ向かう

・去年（正しくは文和二年〈一三五三〉）、一色範氏（一色宮内大輔）に討たれそうになった頼尚が、武光に助けられた際に「今より後、子孫七代に至るまで、菊池の人々に向かつて弓を引き、矢を放つ事あるべからず」と記した起請文を掲げて菊池軍は進撃する

・八月十六日から十七日の戦闘で懐良親王が深手を負い、また、味方である新田の一族が数多く討死するのを目にして、武光は兵を励まし自らも命を惜しまず戦う

・小弐方は頼尚の子・頼高（新少弐）をはじめ約三千人を失い退却するが、菊池方も約千八百人の戦死者を出し、肥後へ退く

〔敬語→懐良親王に対しての敬意の表現〕〔戦闘の一部始終が詳細にわかる描写〕

F　巻第三十六「菊池合戦の事」

康安元年（一三六一）七月、菊池武光が小勢ながら、香椎に陣を取り、少弐・大友の大軍を敗走させる。

・菊池の「家の子」である城越前守の策謀により、菊池の背後の飯盛山の松浦党を蹴散らす〔戦場での裏工作（「智謀」）がわかる描写〕

G　巻第三十八「九州探題下向の事」から「筑紫合戦の事」

康安二年（一三六二）九月二十七日、斯波氏経（探題左京大夫）が九州に下向するも、菊池武光が長者原で探題軍を破る。

・斯波氏経は遊女を連れて下向し、それを非難する者もあった

・氏経の九州探題軍を破った武光は豊後国府に陣を取り、探題と大友、少弐、大宮司の三方の敵を物ともせず三年間対峙した〔菊池軍の強さの要因〕

古典（言語文化・古典探究）の教材としての検討

以上、菊池一族の登場・活躍する七つの場面（**A**～**G**）を確認した。本章では、先に現行の教科書における『太平記』と『平家物語』（軍記物語）や歴史物語等での学習のねらいと照らし合わせ、**A**～**G**が言語文化や古典探究の教材として扱えるか、扱えるとしたらどのような形が妥当であるかを検討してみたい。

A　巻第十一「筑紫合戦九州探題の事」

例えば、『平家物語』の「木曽の最期」では、本文での具体的な主従のやり取りを通じて、その心情と武士の誇りや生き様（死に様）

について理解していくことが求められている。**A**では主従関係でのやり取りはないものの、武時・武重父子の別れが描かれ、古典Bの定番教材である壇ノ浦の戦いにおける平家一門の親兄弟の絆と通じるテーマがある。よって、武士の誇りや生き様（死に様）を理解することのできる場面であると思われる。

また、武時が歌を詠んでいることと、神に対して「おはせよ」「御覧ぜよ」といった尊敬語を用いていることは、和歌の学習とわずかな用例ではあっても敬語の用例という点で、十分教材として扱うにふさわしい場面であると考えられる。

B　巻第十四「節刀使下向の事」から「官軍箱根を引き退く事」

菊池武重の活躍、九州を遠く離れた土地でも他の武将たちとの連携が取れた戦いぶりなど見るべきところは多い。だが、戦いの全体が長いため、中略を入れざるを得ず、省略を入れた部分の説明を工夫したとしても、その数が多くなると古文の原文から物語を理解するという点において教材とするには不向きである。

ただ、複数テキストや他教科との連携授業という場合に見るべきところがいくつもあり、それについては後述したい。

C　巻第十五「少弐と菊池と合戦の事」から「多々良浜合戦の事」

多々良浜の戦いは、『太平記』においてくり返される足利尊氏の強運の一例としては興味深いが、菊池一族の活躍という点では残念に思われる場面が多い。

ただ、複数テキストや発展的な学習としては、尊氏の強運の他に少弐貞経の死をとりあげることができると考えている。これらも後に記したい。

D　巻第十六「新田義貞進発の事」から「正成討死の事」

Bと同様、戦いの全体が長く、さらには湊川の戦いと楠木正成の討死という『太平記』の中でも有名な場面の一つが含まれる部分であるため、菊池一族を主として扱うことが難しい面がある。

しかしながら、武吉に正成の様子を見に行かせた武重の行動は、箱根での戦いの時のふるまいと重なり、武重の性格がよくわかる。また、正成に殉じた武吉は、『太平記』において菊池一族がどのような一族として語られているのかを知る大きな手掛かりとなる。

よってこの**D**も、複数テキストや発展的な学習のために必要であると考えている。

E　巻第三十三「細川式部大輔霊死の事」と「菊池軍の事」（筑後川の戦いを含む部分）

有名な筑後川の戦いの場面であり、菊池武光が少弐の起請文を掲げて進軍するあたりから戦いの終結までであれば、若干長めではあるものの、戦闘の一部始終もわかるため手ごたえのある単元の作成、教材の扱いができると考えられる。

文法的にも、懐良親王と付き従う公家が登場するため、「宮、三ヶ処まで深手を負はせ給ひければ」、「日野左少弁、…葉室左衛門督に至るまで、宮を落とし奉らんと、踏み留まつて討たれ給ふ」といった尊敬語や謙譲語が明確な主語をともなった形で使用されており、数が多くはないという面はあるものの、敬語の学習も押さえることができる。

内容でいえば、九州の地における詳細な戦いの描写（布陣なども含めて）や、菊池軍の強さとは将の気概が兵にまでいきわたっている（武光が「いつのために惜しむべき命ぞや。日来（ひごろ）の契約違へずは、われに伴ふ兵ども、一人残らず討死せよ」と先陣を切っている）ことであるのに加え、武器（鎧）が特別な作りであることを語り手が強調しており、発展的な学習や他教科との連携授業という場合にも活用できる可能性をおおいに秘めた場面である。それらについては後にひとつひとつ検討したい。

F　巻第三十六「菊池合戦の事」

菊池武光が小勢ながら、少弐・大友の大軍を敗走させられたのは、**E**で見たような菊池軍に満ちる気概（**F**では「菊池が気分、元来（もとより）大敵を拉（とりひし）ぐ心根（こころね）」と表現）だけでなく、菊池の「家の子」である城越前守が、敵兵たちに偽の情報を流して菊池の背後の飯盛山の松浦党を蹴散らすことに成功したからであった。戦場での裏工作（「智謀」）がわかる描写は、「千早城の戦い」をはじめとする『太平記』の中のさまざまな戦いで楠木正成が見せているそれに匹敵すると考える。また、城越前守の策謀が成功した背景には、裏切りの多いのが当たり前の環境で敵兵たちが常に疑心暗鬼の状態にあり、不安に陥っていたことがあげられる。その姿は、一貫して宮方であった菊池軍との好対照をなしており、複数テキストや発展的な学習のための使用におおいに耐えうる教材になると考えられる。

G　巻第三十八「九州探題下向の事」から「筑紫合戦の事」

新たに九州探題に任命された斯波氏経であったが、菊池軍を再三見くびり、長者原で打ち破られた。苦戦を強いられたがこの戦いに勝利した武光は、三千騎を率いて探題と少弐・大友らに挑んだため、彼らは各城へ立てこもった。しかし、菊池軍は三方の城を三年かけて果敢に攻めた。語り手は、「菊池が兵、必ずしも皆剛なるべからず。少弐、大友が兵、必ずしも皆臆病なるべきにあらず。ただ、士卒の進退は大将の心に依るゆゑに」と評する。**A**～**G**を通じて、『太平記』の語り手が菊池一族を肯定的に評価しつつも、一方で、天下の形勢というものが必ずしも現実的な側面、現世的な因果に拠らないことを述べる**C**と比較してみる価値のある場面ではないかと考えられる。

授業の基本的な展開に関する提案

『太平記』の菊池一族を古典（言語文化・古典探究）の教材として扱う場合に、次にあげる、二通りの方法を提案したい。

1. 言語文化の『平家物語』の教材を補足する教材として扱う
2. 古典探究における軍記物語の教材のひとつとして扱う

1の場合には、**A**全体か、**E**より懐良親王が負傷して菊池武光が檄を飛ばす場面を含めて抜粋するのがよいと考えている。登場人物の心情という点では**A**が適切と思われるし、息が詰まるような戦闘の描写という点では**E**の抜粋であるが、**A**・**E**ともに敬語の用例があることも考慮した。

2の場合には、先に見た『太平記』「千早城の戦い」で描かれる智謀という点では**F**の教材が適するし、『平家物語』の壇ノ浦の戦いに比した場合は、海ではなく陸での戦いを比較するといった点で

Eの部分部分を省略してリード文を付したりして使用するのが良いと思われるが、E・Fはともに敗者の側の心情は見落とされてしまう可能性がある。すでに「木曽の最期」を学んでいれば問題はないとも言えるが、AやCで父の死とそれを悲しむ子を描く教材と複数テキストで扱うということを考えてみてもよいだろう。

国語の授業として探究的な取り組みを模索する

Aより　櫛田宮での不思議　・　Cより　足利尊氏の強運

先に検討した「千早城の戦い」（筑摩書房「古典探究」）において、千早城を攻める幕府軍の大将である長崎と工藤の連歌「さきかけてかつ色見せよ山桜」「嵐や花の敵となるらん」が、「味方を花になし敵を嵐に比へければ」、「禁忌なりける表事（＝きざし・前兆）かな。」とされたことを問う「理解」の課題があった。武時の櫛田宮での不思議な体験と比較して、不吉な出来事が起こる前ぶれにどのような共通点や相違点があるかといったことについて、グループで意見を交わしたりできると考える。さらに、尊氏の強運もそれらと考え合わせることで、物事が人知の及ばないところで定められているという思想に考えが及べば、軍記物語『太平記』の発展的な理解につながると思われる。

Aより　袖ヶ浦の別れ

新学習指導要領とそれに基づく教科書では、言語活動の比重が増し、言語文化の『平家物語』においても朗読や、作品の享受の歴史とその具体的なあり方について、調査して追体験してみる活動が奨励されていた。今回とりあげた七つの場面はどれも魅力的ではあるが、木曽の最期や壇ノ浦の合戦に比する場面はやはり、菊池武時と武重の別れとその後の武時の戦いの場面ではないだろうか。『平家物語』を学んだ後に、現代語訳から翻案へと移行させ、脚本、音楽、さらには演劇といった表現に取り組ませてみたい。

Cより　筑後川の戦い

この時代、起請文や親王が先陣を切るとはどういう意味を持つのであろうか。少なくとも、『太平記』の中においての菊池一族が評価される点がどこにあるのか、『太平記』の語り手の意図がどこにあるのかを考えてみるのは、諸説ある『太平記』の主題にまで考えを致す端緒となるであろう。また、武光は一度少弐頼尚を助け、頼尚が自ら記した起請文を持ち出しているというのも見逃せない。

他教科との連携を模索する

直前の「国語の授業として探究的な取り組みを模索する」では、言語活動からの流れでの他教科との連携を示唆したが、はじめから古典文学作品を他教科と関連付けて実践する場合について検討してみたい(9)。

A～Gより　菊池一族の一貫した態度

鎮西探題攻めを決めた菊池武時、その父の志を継いで箱根竹ノ下の戦いに官軍として加わった武重、湊川の戦いにて楠木正成ら一族と運命を共にした武吉、そして、懐良親王を奉じて九州統一を果た

した武光らは、後醍醐天皇の挙兵より一貫して宮方であり、義を貫いた一族として『太平記』での評価を見ることができる。近年、南朝方の「忠臣」という旧来の枠を外しても、室町幕府の秩序に組み入れられなかった点で独自の存在感を示した一族と評価がなされている点と合わせ[10]、『太平記』の菊池一族の登場・活躍する場面を追うことの意義はおおいにあると考える。

『栄華物語』は「道長賛美のみ」で『大鏡』には「批判精神がある」とされる従来の作品評価が、『御堂関白記』や『小右記』と読み比べた際には、いずれもが「物語」であり、『栄花物語』成立の意図や、史実ではないのに『大鏡』が「真実性（リアリティ）」に富むのはなぜかを表現の面から考えさせることに意味があるとしている[11]という中島和歌子氏による論考は参考としたい。

Aより　袖ヶ浦の別れ

先に、物語の翻案から芸術的な表現への発展を示唆したが、芸術科や総合的な学習の時間（新指導要領では「総合的な探究の時間」に改められた）との連携で、演劇や音楽・ダンス等の身体活動を取り入れることは、学校教育における有効な指導法である。また、地域の伝統芸能を継承するといった事例は、校種を問わず全国的に見られる。ただ、地域教材としての古典文学作品をそうした表現活動に発展させるという事例は調べた限りではなく、生徒の創造性を刺激する取り組みとなるのではないだろうか。

さらには、総合的な探究の時間や専門学科の商業科を置く学校において、物語をベースとした菓子やそのパッケージなどの商品開発企画[12]に取り組むというのはどうであろうか。そうなると、菊池の米を素材としたお菓子や、懐良親王が京都からもたらしたという松風[13]に関連して、菊池の食の歴史、菓子の製法なども家庭科として扱うことができる可能性も示したい。社会に出てから必要とされるデザイン思考[14]的な発想、町おこし・地域の発展に必要な「郷土を愛する」具体的な行動となることが考えられる。

B・Eより　菊池千本槍・「菊池が着たる鎧」の威力

筆者がかつて勤務した理工系大学附属高校では、各教員が担当する科目の中で、科学技術的な観点を取り入れた授業を実施するという取り組みが合った。高等学校の古典（高一・国語総合と高二・古典A）では、鳥取県の国宝・通称「投入堂」について扱ったことがあるが、生徒の反応も良く、様々な可能性を含む授業となった[15]。

それにならえば、槍や鎧について、九州や菊池における鉄の精製や武具の制作の歴史、強い鉄・武具を作れた技術の科学的な根拠、武具に始まり今に残る伝統的な技術などを理科や地理歴史科[16]の授業と連携して行うことができるのではないだろうか。

Eより　筑後川の戦い

筑後川の戦いについては、兵の配置や戦況が細かく記してあるため、これについて地形なども反映してデジタル化するのを情報科や専門学科の情報科・工業科を置く学校で取り入れてはどうか。そうでなくても、おそらくこうしたことが得意な生徒はいるはずなので、『太平記』の探究的なグループ学習でこれをテーマに作成するグループがあってもよいし、自由課題レポートを課す際のヒントとすることも考えてみたい。

また、高校生でも難しい課題かと思われるが、少弐の起請文を通じて互いに考えさせてみたいことがある。少弐と菊池のあり方についてディベートさせ、絶対的な答えが出ないであろう問題にもアプローチさせてみることだ(17)。現代の法律や倫理観だけではなく、当時の道理や「菊池家憲」等に比し、法や倫理を通じての歴史の見方、歴史を通じて現代的な問題においても我々が問い続けなければいけない価値や共存の精神に気づくきっかけとなってほしい。これらは、地理歴史科、公民科との連携を図りたい。

実を言えば、『太平記』における菊池の敵役としての少弐・大友については、苦慮するところがあり、例えば、**A**で菊池武時の死を扱うのであれば、**C**で少弐貞経の末子の宗応蔵主が父の火葬の火に飛び込んで後を追う場面も必ず同時に扱いたいというのが個人的な希望でもある。『太平記』において少弐・大友の一族は、古典的な物語ゆえのわかりやすい敵役ではあるものの、『太平記』全体を通じてみれば少弐・大友に限らず、どの人物も組織も、良い面と悪い面を状況状況において書き分けていることは、必ず触れなければならないと考えるからである。そうした点で、『太平記』および一貫して宮方であった菊池一族を教材として扱うには、これ以外にも特別に留意しなければならない面がある。それを次章で述べてみたい。

『太平記』と菊池一族を教材として扱う際の特別な留意点について

神戸の湊川神社には、楠木正成をはじめそこで運命をともにした一族と、菊池武吉が祭られている。これは、本論考では**D**とした『太平記』の場面に基づいていることがわかる。そして、湊川神社は水戸光圀による楠木正成の崇敬以来、幕末の志士の憧れの対象、明治から戦前における皇族や政治家にとっても特別な神社として、やがて思想的に過激な様相も帯び、現代に至っている。そうした流れの中に菊池一族もあることを初めて知り、学校の現場で『太平記』はおろか、菊池一族を扱うことにも慎重に慎重を期さねばならないことを知った。

しかし、それを理由に、古典の物語としても大変に魅力的な郷土の歴史的・文化的な資産を放置しているのは惜しいとしか言いようがない。そこで、あくまで『太平記』の菊池一族を扱うということを前提として、この件についての個人的な見解をいくつか示しておきたいと思う。

まずひとつは、前章でも確認した、忠臣としての菊池一族像から解放された、客観的な歴史学の成果を同時に学ぶということである。ふたつめは、幕末・近代以降の日本の歴史と連動する一族に対する社会的な評価それ自体を、変遷する社会の価値観を通じての歴史として、発展的課題として取り上げさせるといった方法である。

右記の二つについては、地理歴史科、公民科の協力が必須である。

もうひとつは、湊川神社での活動が一筋の光明となるのではと考えている。湊川神社では、「楠公祭 楠公武者行列」の復活と継続的な開催に際して、地域の氏子による所役の継承の困難という事態から神社が所役を一手に管理するとなった時に、一般参加者を募ったところすぐに全国から申込みがあったという。また、当時のものをできるだけ忠実に再現したという装束等に外国人が興味を示したことに触れ、祭の新しい展開にその継承を望む人々の期待と希望が見

出されたことを知った。これは、意図してできたことではなく、当事者が、楠木正成と神社を歴史・文化として継承していきたいと前に進んだことで、思いもよらないところから打開できるきっかけをつかんだということであろう(18)。

以上は、筆者が地域の人間ではないからこその見解ではあるが、だからこそ、菊池一族が古典文学の教材として教科書で取り上げられている他の作品と同じように魅力的であり、何に注意すればそれを伝えることができるかというところを原点とした発言であると見ていただければ幸いである。

今後の課題

この論考において、限られた時間や紙幅、また、調べ始めてからわかったことなどもあったため、残された課題について示すことで本稿の締めとしたい。

1. 小・中学校での扱いの検討

市内の一部の中学校の社会科において、元寇や地域との関係の中で菊池一族を扱っている話を伺った(19)。また、懐良親王と菊池武光との関係をストーリーにした『マンガふるさとの偉人 菊池武光伝』(菊池市教育委員会発行)も大変興味深く拝見した。本論考では、高等学校の古典で『太平記』の菊池一族を教材とすることに焦点を絞ったが、言語活動(朗読や演劇など)は、小中学校では定番の指導法でもあり、菊池市にすでにある〝資源〟も積極的に導入しつつ、今回高等学校での提案がどの程度、どのような形で小・中学校に適用できるかについては興味を覚えている。

2. 単元を設定しての具体的な授業案を作成

今回は、果たして『太平記』の菊池一族の場面が、国語をはじめとする学校教育における教材にできるのかという点を検討するため、まず学習指導要領や国語教育的な視点から始めて、現行の教科書で採用された『太平記』の場面と本文、他の軍記物語や関連する作品を確認した上で、教材として使用する部分や留意点に触れるという段階を踏んだため、実際に単元を作成するところまで至らなかった。

本論考では提案にとどまった他教科との連携までを含めて、単元の設定と授業案を作成し、実践を試みてくださる先生方や学校があればと考えている。実践を通じて問題点が明確になり、個々の学校の実情に即した授業が展開されるのが本来であるだろう。

3. 副読本の作成

『太平記』の菊池一族の場面を抜粋し、その指導に特化した副読本があるとよいと思った(20)。対教員用あるいは生徒用の注釈や現代語訳が付され、教員用には指導実践の蓄積もなされていけば、指導の手引きと同時に、市の教育的かつ郷土史上の資産ともなるのではないだろうか。

語科改定の趣旨及び要点」として、以下のような指摘がなされている。

高等学校では、教材への依存度が高く、主体的な言語活動が軽視され、依然として講義調の伝達型授業に偏っている傾向があり、授業改善に取り組む必要がある。また、文章の内容や表現の仕方を評価し目的に応じて適切に活用すること、多様なメディアから読み取ったことを踏まえて自分の考えを根拠に基づいて的確に表現すること、国語の語彙の構造や特徴を理解すること、古典に対する学習意欲が低いことなどが課題となっている。

それを受け、「古典探究」の目指すところとして、以下のようなことが述べられている。

共通必履修科目「言語文化」により育成された資質・能力のうち、「伝統的な言語文化に関する理解」をより深めるため、ジャンルとしての古典を学習対象とし、古典を主体的に読み深めることを通して伝統と文化の基盤としての古典の重要性を理解し、自分と自分を取り巻く社会にとっての古典の意義や価値について探究する資質・能力の育成を重視して新設した選択科目である。

「アドバイス」の最後には、「「木曽の最期」の代わりに、各自の知っている昔話の内容を朗読してもよい。」という柔軟な姿勢が示されている。

二作品を収録しているのは九冊で、軍記物語と日記として別の章に配するものがほとんどであったが、「参考」として『平家物語』の最後に『建礼門院右京大夫集』の本文と両作品の違いについての簡潔な説明を加えているものもあった。

例えば、山田丈美氏は、「教科等横断的指導」の一例として、国語科と理科を取り上げ、『竹取物語』を学ぶ際に、「「月」の意味を、天体の「月」と、時間・暦法上の「月」の二側面から捉え」る単元学習の提案を行っている（「教科等横断的指導の新たな構想―国語科と理科を例にして―」）。石村由里氏は、職業体験で学んだことを孔子の言葉になぞらえて下級生に発信する単元を実践し

注

(1) 高橋邦伯氏「伝統的な言語文化の学びを通して言語生活の充実を」（『月刊国語教育研究』二〇二二年三月号（通号五九九）「特集　伝統的な言語文化に親しむ単元開発」）所収の「問題提起」による。「伝統的な言語文化」とは、古典文学作品、ことわざ・慣用句・故事成語、古典芸能がその範囲となる。

(2) 「地域教材を学びの核とする」〔単元「ヤマトタケル　東征　～古文で知る千葉の伝説～」〈言語活動「古典を読み比べ、構成や展開、表現の仕方について評価する・古典学習の意義を見いだす」〉〕（監修＝日本国語教育学会、編著＝高橋邦伯・渡辺春美『シリーズ国語授業づくり中学校 古典―言語文化に親しむ―』二〇一八年八月一四日（東洋館出版社）による。

(3) 中村佳文氏「うたのちから―「短歌県づくり」と創作学習―」（『月刊国語教育研究』二〇二二年一月号（通号五九七）「特集　第45回西日本集会―宮崎大会―」所収の「問題提起」による。

(4) 野元博子氏「体験の共有化を図る国語科の授業づくり―長期乗船実習をもとにした短歌創作を通して―」（前掲『月刊国語教育研究』二〇二二年一月号（通号五九七）所収の「シンポジウム「短歌県みやざきの授業実践」」内の「実践報告」①による。

(5) 「高等学校学習指導要領解説　国語編」（平成二二年六月）によれば、「「A」を付した科目」は「言語文化の理解を中心的なねらいとし」、一方の「「B」を付した科目」は、「読む能力を育成することを中心的なねらいとしている」という違いが示されている。また、新学習指導要領の「言語文化」および「古典探究」では、古典Aが持っていた「理解」「探究」の面を重視しており、その点において、『太平記』の菊池一族を授業に導入する基盤はかつてより強まったとも筆者はとらえている。

(6) 「高等学校学習指導要領（平成三〇年七月告示）解説　国語編」によれば、「国

て、国語科と総合的な学習の時間を関連付けている（「生きた学びとしての「論語」の学習」）。これらは、小中学校での実践ではあるものの、新学習指導要領に示されている「教科等横断的指導」は重要性を増し、今後さらに各校種での充実が図られると考えられる（『月刊国語教育研究』二〇二一年一〇月号（通号五九四）「特集　他教科との関連を生かした単元開発」所収の「特集論文」①③による）。

（10）小川弘和氏「中世菊池氏の虚と実」（参考文献一覧の熊本県立美術館『日本遺産認定記念 菊池川二千年の歴史 菊池一族の戦いと信仰』所収）、および、二〇二三年二月にYouTube配信された「菊池一族オンライン歴史セミナー」の小川氏が講師をつとめた第一回「中世菊池氏研究の最前線」による。

（11）中島和歌子氏「『大鏡』『栄華物語』が国語教材に選ばれるのはなぜか」（参考文献一覧の松田浩ほか『古典文学の常識を疑うⅡ』所収）による。

（12）東京書籍の古典Bの教科書には「ご当地キャラクターと古典」というコラムがあり、各地のキャラクターの由来などを調べた上で、自分でもご当地キャラクターを考案する、キャラクターに限らず古典作品や伝説をもとに考案されたものを調べる、といった課題が提示されている。

（13）財団法人熊本開発研究センター『熊本の食べ物―より豊かな食生活のために―』（発行年不明、熊本県立図書館受け入れ印 昭和五六年二月二三日）

（14）顧客のニーズから実践的・創造的な課題解決を導く方法の意味で用いられるビジネス用語であるが、学校現場でもその発想法が導入され始めている（Design Thinking）。

（15）拙稿「鳥取・三徳山三仏寺奥の院（通称：投入堂（なげいれどう））を題材とした授業「日本一危険な国宝」（二〇二二年九月三〇日『人文研究』（神奈川大学人文学会）第二〇六集）

（16）「菊池千本槍」の名称は有名であるが、『太平記』には武重が戦いに槍を用いたとは記されていない。『梅松論』にも書かれてはいないということであるが、『菊池伝記』や『菊池余芳』には刀工延寿とともに伝えられているという（『菊池市史』『日本遺産認定記念 菊池川二千年の歴史 菊池一族の戦いと信仰』による）。ここでは千本槍の伝承を支える九州における製鉄や武具の歴史、元寇で蒙古軍が使用した武器や集団戦法の影響についての技術や科学的な知識との関連付けが有効と考える。

（17）神戸大学附属住吉中学校および神戸大学附属中等教育学校での、中学二年生の社会科の実践報告「江戸の罪と罰」（参考文献一覧の神戸大学附属住吉中学校・神戸大学附属中等教育学校『生徒と創る協同学習―授業が変わる・学びが変わる―』所収）にヒントを得たことも付け加えておきたい。それによれば、「江戸の罪と罰についての裁判事例などを多様な視点から考察・意思決定する学習は、法制度等の社会制度の理解のみならず、人々の心性にも迫ることができ、江戸の認識が獲得できる」ことと同時に、「現代の犯罪観との相違性や共通性を顕著に見出すことができる」とある。

（18）二〇一八年五月一八日発行『神社発信』内の特集記事「湊川神社 楠公祭 楠公武者行列 平成30年5月26日に斎行」による。具体的なことは記されていないため事実はわからないものの、行列の一般参加者には、楠木正成や南北朝時代、および甲冑や装束のファンなど、思想的なこととは無縁な様々な人々が数多く集まったのではないかと筆者は推測している。

（19）菊池市中央図書館にて調査をしていただいた結果、菊池プロモーション室に所属（当時）の佐伯明日香氏を外部講師に迎えて『太平記』をベースとした菊池一族の「話」（プレゼンテーション）を組み込んだケースが存在した。佐伯氏のプレゼンテーションについては、歴史コミュニティである南北朝時代を楽しむ会の第38回例会「南朝の雄・菊池一族、その魅力と広まり―菊池によるまちおこしの今―」@Zoom―菊池ってすごい！知りたい！―」（二〇二一年一〇月一五日開催）

で筆者も拝見した。

（20）菊野雅之氏は、「学習者の実態と指導のねらい」に沿って、「複数テキストを読むためには、最初の通読で内容が理解できる程度に調整された傍注テキストを作成する必要がある」としている（『月刊国語教育研究』二〇二二年三月号（通号五九九）「特集　伝統的な言語文化に親しむ単元開発」所収の「古典単元を開発する視点と土台」〔「特集論文」①〕による）。

参考文献一覧

・梶田叡一＝監修、中村哲＝編著『学校を活性化する伝統・文化の教育』（学事出版、二〇〇九年四月一五日発行）
・菊池市史編さん委員会『菊池市史 上巻』（菊池市、一九八二年三月八日発行）
・熊本県立美術館『日本遺産認定記念 菊池川二千年の歴史 菊池一族の戦いと信仰』二〇一九年展覧会図録（菊池川二千年の歴史展実行委員会、二〇一九年七月一九日発行）
・建武中興十五社会＝編集『建武中興六七〇年記念 南朝関係十五神社巡拝案内記』（建武中興十五社会、二〇〇三年一二月一五日発行）
・神戸大学附属住吉中学校・神戸大学附属中等教育学校『生徒と創る協同学習―授業が変わる・学びが変わる―』（明治図書出版、二〇〇九年一〇月一四日発行）
・全国連合退職校長会＝編著『未来を拓く学校の力―地域と学校の心触れ合う教育活動―』（東洋館出版社、二〇一五年一月三一日発行）
・谷田博幸『国家はいかに「楠木正成」を作ったのか―非常時日本の楠公崇拝―』（河出書房新社、二〇一九年二月二八日発行）
・日本国語教育学会＝編『国語教育総合事典（新装版）』（朝倉出版、二〇二一年九月二五日発行）
・日本国語教育学会＝監修、高橋邦伯・渡辺春美＝編著『シリーズ国語授業づくり中学校 古典―言語文化に親しむ―』（東洋館出版社、二〇一八年八月一四日発行）
・日本国語教育学会＝監修、飯田和明・上谷順三郎・児玉忠＝編著『シリーズ国語授業づくり中学校 文学―主体的・対話的に読み深める―』（東洋館出版社、二〇一八年八月一四日発行）
・野中潤＝編著『学びの質を高める！ＩＣＴで変える国語授業―基本スキル＆活用ガイドブック―』（明治図書出版、二〇一九年一月二五日発行）
・町田守弘＝編著『サブカル国語教育学「楽しく、力のつく」境界線上の教材と授業』（三省堂、二〇二一年九月一〇日発行）
・松田浩・上原作和・佐谷眞木人・佐伯孝弘『古典文学の常識を疑う』（勉誠出版、二〇一七年五月三一日発行）
・松田浩・上原作和・佐谷眞木人・佐伯孝弘『古典文学の常識を疑うⅡ 縦・横・斜めから書きかえる文学史』（勉誠出版、二〇一九年九月一〇日発行）
・松本泰道・上野眞也＝編著『熊本大学政創研叢書10 地域を育てる大学の挑戦』（成文堂、二〇一六年三月二八日発行）
・山村研一・上野眞也＝編著『熊本大学政創研叢書7 地域を創る大学の挑戦』（成文堂、二〇一〇年三月三一日発行）
・マンガ菊池武光制作委員会・菊池市中央図書館＝企画・原案『マンガふるさとの偉人 菊池武光伝』（菊池市教育委員会、二〇二二年四月三〇日発行）

〔謝辞〕菊池市中央図書館の安永秀樹館長と職員の皆様、元同僚の森本浩子先生ほか、本論考の調査・研究のためにお力を貸してくださったすべての方々に厚く御礼申し上げます。菊池プロモーション室の広報印刷物もおおいに参考にさせていただきました。ありがとうございました。

菊鹿型宝篋印塔の誕生と展開

髙橋　学

はじめに

私は令和三年度菊地一族調査研究事業助成において、熊本県菊池市輪足山松林院東福寺境内にある石塔群の分析を行い、その成果を報告した（髙橋二〇二三ｂ）。その際に、他地域には見られない特徴を持つ宝篋印塔[1]に注目したが、詳細な分析までは至らなかった。今回、令和四年度菊地市の研究助成を継続して受けることが出来たため、昨年度の調査で注目した特徴的な宝篋印塔、いわゆる「菊鹿型宝篋印塔」について考察を進めたい。なお菊鹿型宝篋印塔の定義については前稿（髙橋二〇二三ｂ）を参照して頂きたい[2]。

一・宝篋印塔の誕生と伝来

まず、宝篋印塔とはどのようなものなのか。宝篋印塔は仏塔の形式の一つである。仏塔とは、釈迦の遺体・遺骨、またはその代替物を指す仏舎利を安置した仏教建造物のことを表し、土や煉瓦で構成されたマウンド（墳丘）である。これを古代インドではストゥーパ（stūpa）と呼んでいた。このストゥーパで著名なものとして、釈迦が最初に仏法を説いた鹿野苑である聖地サールナートのダメーク塔、ナーランダ遺跡の大塔、そしてサンチーの塔がある。このサンチーの塔が伏鉢形であり、以後仏塔の原型の一つとなったと考えられている。ストゥーパがインドから中国へ伝わって漢語訳された際に、卒塔婆と表記され、これが日本に伝わり、塔婆と省略され、さらに略されて塔と言われるようになった[3]。これら仏塔の形は宝篋印塔をはじめ層塔、笠塔婆、宝塔、多宝塔、五輪塔、板碑、石幢等、多種多様である。宝篋印塔は『日本石造物辞典』（二〇一二）によると、「方形の基礎、塔身、屋根（笠）、相輪からなる塔で、屋根の四隅には隅飾を有する。塔身には金剛界四仏や胎蔵界四仏、顕教四仏の種子や像容を表すのが一般的である。」とある。また宝篋印塔の名の由来は、「一切如来心秘密全身舎利宝篋印陀羅尼経」という仏教の経典をその内部に納めることに由来するとされている。

a．中国での宝篋印塔の誕生

中国現地での調査を進めた吉河氏によると、中国において日本で言うところの宝篋印塔[4]の原点は寧波市にある阿育王寺に保存されていた「釈迦舎利塔」である。現認が出来ないためあくまで推定ではあるがこの塔が宝篋印塔形をしていた可能性を指摘している（吉河二〇〇〇）。この阿育王寺の舎利塔が中国で広い信仰を受けて、その流れのなかで銭弘俶[5]による金属製小型塔[6]いわゆる銭弘俶八万四千塔の造作に繋がり、さらに信仰が広がったとされている。その金属製小型塔との流れとは別に先述の阿育王寺の舎利塔を模倣した石造物が出現している。現在確認できる阿育王寺模倣塔としては洛陽橋南塔が最古のものであるが、これには一〇五九年の銘があるため、この辺りに一つ定点がおける。その後、中国宝篋印塔の展

開は、十二世紀後半〜十三世紀初頭まで作られていたことが判明している。この阿育王寺模倣石塔とはまた別の流れで作られたとされている仏塔の1つに注目したい。これは、吉河氏によっても紹介されているが（吉河二〇〇〇）、重要なものであるので、詳細を記す。それは大阪市立美術館所蔵の山口謙四郎東洋美術コレクション内の中国石仏関係の一つで四面像と呼ばれている石造物で北周、天和六年（五七一）の銘文が確認されている（図版一二参照）。黄花石製。高さ36．5㎝、幅21．0㎝。基壇一段のうえに四段の段形を持ち、そのうえには塔身部がある。四面は彫り窪めて龕をつくり、内部に仏像を安置する。その上部には笠部を配置し、この笠部の下部に三段の段形を持つ。笠部の四隅には隅飾として半パルメット形飾りを配し、笠部上部は伏鉢状となっている。この伏鉢の頂部には枘穴があるため、頂部には相輪があったことが推定されている。仏像は、二面は座像、他の二面は倚像と二仏並座像を表しており、二仏は釈迦・多宝、倚像は弥勒、座像は釈迦、阿弥陀と考えられている。二仏座像は法華経の影響と思われる。また基壇四面を巡るように銘文が彫られている(7)。これら黄花石製の四面像は西魏・北周から隋にかけて、盛んに造像されたとされている。すでに指摘（茨城県立歴史館一九九〇）があるように、これは単に四面像というよりはインド式のストゥーパの流れを汲む仏塔であり、宝篋印塔の源流の1つと見るべきだろう。特に注目されるのは基礎からの段形と笠部下の段形がこの六世紀後半の段階でも造形として存在していることと、笠部の四隅にはパルメット形隅飾り(8)、また笠部の上に伏鉢状のものがあり、これは後述するが九州の初期宝篋印塔にも確認できる要素である。

b．日本での宝篋印塔の受容

さて従来の研究では、日本で十三世紀に成立する宝篋印塔は、銭弘俶八万四千塔と称される金属製小型塔を起源として成立すると考えられてきた（石田一九六九、川勝一九七八、一九八八）。但し、村田治郎氏などから金属製小型塔だけの影響ではなく、中国石造宝篋印塔からの影響もあるのではないかと指摘があったが（村田一九六九）、前述の銭弘俶八万四千塔が日本の宝篋印塔の原型であるという説が定説化していた。ところが、吉河功氏による中国での現地調査が行われたことで、中国の石造宝篋印塔を祖型として誕生した可能性が指摘された（吉河二〇〇〇）。山川氏、佐藤氏、岡本氏などにより行われた中国現地での現存する石造物を調査に基づく研究では、吉河氏の説を元に現地中国の資料を観察、図化するという考古学的手法で研究を発展させた。その成果によると、日本での宝篋印塔の受容が多段階に及び、大別すると原始宝篋印塔の伝来（六世紀末〜七世紀）→金属製宝篋印塔（九〜十世紀）→石造宝篋印塔（十三世紀）という三回に渡る大きな波があったと考えられるが、日本最古級と考えられている宝篋印塔（旧妙真寺宝篋印塔（通称鶴ノ塔））と金属製小型塔、中国の石造宝篋印塔を比較した結果、中国製石造宝篋印塔からの直接的な影響が認められて、日本の宝篋印塔の成り立ちとしては金属製小型塔との相関関係が薄いことが分かったとする。もちろんどの時代においても中国からの影響が強くみとめられるが、重要な点としては日本に入ってきた銭弘俶八万四千塔などの金属塔が日本の石造宝篋印塔の直接の祖型ではない可能性が高いことを指摘したことが評価できる。たしかに、仮に

国内に入ってきた金属製小型塔が模倣対象だとしたら、なぜ十三世紀になるまで数百年間の間、石造宝篋印塔が作られなかったヒアタスが生じたことに疑問が生じる。これに関して、過去の研究では明確には答えられていない、とする(9)。なお山川氏らによると石造宝篋印塔のイメージが日本へ招来されたのは、一二三〇年代に渡来僧によってもたらされたと想定している（シルクロード学研究センター編二〇〇七）。山川・岡本氏の論以前に、古川久雄氏により、「旧妙真寺塔は清涼寺南塔と同じ頃に（あるいはやや先行して）京都オリジナルの宝篋印塔として、京都石工が試作したものではないか」とする推論が提示されている（古川二〇〇一）。古くは田岡氏の指摘もあるが（田岡一九七〇）、古川氏は旧妙真寺塔を正応から永仁頃（一二九〇年代）の資料とみている。ここでは本論の本筋とは異なるため、この日本での宝篋印塔の初期展開の論議には深入りはしないが、とても興味深い論議である。ただ、どちらにしても、日本最古級の宝篋印塔群は、暦仁二年（一二三九）頃の成立とされる京都高山寺の二塔と、元々高山寺の別院で尼寺であった善妙寺跡の小学校から出土し、現在は為因寺に安置された宝篋印塔（文永二年（一二六五））銘の三基として異論はないだろう。因みに在銘宝篋印塔で最古は、奈良県生駒市興山往生院宝篋印塔で、銘文に正元元年（一二五九）である。これは京都高山寺宝篋印塔と違い、すでに定型化に近い宝篋印塔の構成となっている。

同論文で他にも古川氏は、京都石工のオリジナルの宝篋印塔形式として誠心院（しょうじんいん）型宝篋印塔を提案しているが、後述する川西の宝篋印塔の成立背景を考えるうえで、同時代の京都の宝篋印塔である誠心院型宝篋印塔は注目すべきと考えている(10)。

c・九州での宝篋印塔の受容

原田氏による当該研究史を紐解くと、九州地域での最古の宝篋印塔の事例は大分県臼杵市深田宝篋印塔（日吉塔）や鹿児島県川辺町下山田鳥越宝篋印塔が挙げられている（原田二〇一二）。深田宝篋印塔の年代観は、多くの研究者の検討があり、鎌倉時代と見られることは研究者間でも評価は変わらないが厳密な時期判定については意見が分かれている。多くは鎌倉時代中期～後期と見ており、原田氏は深田宝篋印塔については、鎌倉時代中期（文永期）、一三世紀後半と推定している。たしかに豊後地域の石造物に注目すると、平安時代後期から鎌倉時代中期にかけて秀逸な多くの層塔等が作られており（髙橋二〇二二）、深田宝篋印塔のような大型の宝篋印塔が造塔されていても違和感はない。深田宝篋印塔は、臼杵磨崖仏の南側、深田満月寺の脇に所在しており、総高約4．2mを測る大型塔である。阿蘇溶結凝灰岩製。塔身正面に木造建築の用に扉が備え付けてあった痕跡が明瞭に残っており、塔身内部も厨子状に刳り抜かれていることからも内部に何か安置していたと考えられる。そして石塔としての構成に大きな特色があることを多田隈氏が指摘している。地覆石を除き、基礎、塔身から笠下部の段形二段と笠部の軒部、笠上の三段、その上の二段、そして相輪とそれぞれ一石、つまり計五石構成にしていることが指摘されている（多田隈一九七五）。多田隈氏の指摘の通り、非常に特色がある造りをしているのだが、今回注目したい点として、一つ目に隅飾りが別石であることと、二つ目に通常、塔身は別石になることが多いのだが、この塔は笠の軒部と笠下二段の段形が塔身と一石造りになっている点に注目したい。

これらは豊後において類例がないが、実は今回取り上げる菊鹿型宝篋印塔と共通する要素が見受けられる(11)。

下山田鳥越宝篋印塔は、鹿児島県川辺町下山田鳥越に所在するもので、現在、現地には同一形式で二基ある（図版九参照のこと）。この石塔は、基礎三段、塔身、笠部下段形二段、笠部の隅飾は別石一弧が立つもので、一番の特徴は笠部の上部が三角形の屋根型を示すことである。また石塔を観察すると基礎は一石、基礎上段形二段は別石、塔身は別石、笠部下段形二段は別石、笠部と隅飾は別石、屋根型も別石である。また、塔身は二基あるが、一基は無文でもう一つは四面に（trāḥ）タラーク（宝生如来、虚空蔵菩薩）の種子を彫られている。斎藤氏曰く、日本天台密教は、「大日経」（胎蔵界）、「金剛頂経（金剛界）にあわせて、『蘇悉地羯羅経（そしつじからきょう）』を重要視している(12)。

原田氏の指摘では、この笠部上部の屋根型や、小振りの隅飾りはこの宝篋印塔からほど近くに存在する鹿児島県南九州市川辺町の清水磨崖仏(13)群中の三大宝篋印塔を代表とする清水磨崖仏宝篋印塔と共通する特徴である。

長崎県南島原市所在の茸山宝篋印塔（鎌倉時代後期）も古い段階の大型宝篋印塔と位置づけられている（大石一九九九）。大石氏によれば島原半島の大菩薩神社に所在するこの塔は地元産出の安山岩製で、損傷が激しいが元々は二mを越える長崎県内最大級の宝篋印塔だった可能性が指摘されている。笠部は下段二段の段形を持ち、上段は五段。相輪部は伏鉢が枡型を呈す、いわゆる九州型の特徴がある。また、下端請花の二重単弁を三葉の彫り出しにしているのは肥前型の初期の特徴である。但し、時期の認定には異論があり、鎌倉時代後期末から南北朝初期の可能性もあり得ると思われる(14)。石塔の特徴からも菊鹿型宝篋印塔との関連性は薄いと考えている。

二．菊鹿型宝篋印塔の分布

二章では具体的に菊鹿型宝篋印塔と認定した石塔を提示する。位置図は図版一を参照。

①川西の宝篋印塔（図版二）（正和三年（一三一四）銘）熊本県指定文化財熊本県山鹿市菊鹿町下内田川西

菊池川支流の下内田川の右岸にあたる河岸段丘上に七m四方、高さ一mの土壇が構築され、その中央に石塔が建てられている(15)。この石塔は古くから注目されていた(16)。周りは水田。現在の高さは二．六八mだが、笠部上部や相輪部が欠落しているため、それらが完備された本来の姿であれば、三mを越える日本有数の巨大な宝篋印塔であったとされてきた(17)。阿蘇溶結凝灰岩製。基礎は正方形の切石を積み上げていき、上部に行くに従い、徐々に寸法が小さくなる。但し一番下の切石は石塔すべての重量を支えるためか、他のものより厚みが増している。またこの基壇初段には、銘文が彫られている。塔身は四角形で無銘。西面上部に半円形で五cm程度の穴が穿ってあり、塔身内部が空洞でそこに何かを納めた奉納孔であることがわかる(18)。笠部も切石積み構造で、それぞれ別石で、塔身から上に組み上がっている。笠部四隅には隅飾り（方立）とよばれるものがあり、その形は馬耳状とも羽根状とも称される独特なもので、これも別石作りで差し込み式の構造になっている。現状では4

つ中2つしか残存していない。また、本来はこの上に数段の切石が積まれ、その上に相輪があったと考えられる。現存する笠部上部の平坦面には枘が見当たらないため、段形をそのまま積み上げたと考える。銘は基礎最下段の東面にしっかりとした字形で一〇行にわたり刻まれている。

奉造立
寶篋印石塔
一基
正和三年歳次甲丑
三月廿八日
大檀那地頭
沙弥道妙
大法師位遍照金剛
真空
并真蓮尼

この銘文によりこの宝篋印塔が建てられたのが正和三年であり、地域の地頭であった者が大旦那として石塔建立の金銭的負担を担ったことがわかる。この地頭はおそらく歴史的な環境からすると、内田相良氏が想定されている。法名を沙弥道妙とするが俗名は不明(19)。大法師位遍照金剛は弘法大師こと空海を示しており、真言宗に帰依した者による造塔であることがわかる。最後に記載された連名はおそらく夫婦の法名と考えられ、沙弥道妙の両親で逆修供養と推定される。

立地から、内田相良氏の居城である若宮城と山ノ井城に挟まれた場所であり、菊地川の支流である上内田川右岸の近接地にあることで河川流通の際のランドマーク的な意味合いが強いのではないかと考えられる。

②元吾平(あいら)神社宝篋印塔（図版三、十二）（文保三年（一三一九））　熊本県山鹿市菊鹿町相良

①の川西の宝篋印塔から北へ六kmほど奥まったところに相良寺(あいらじ)があるが、現在その境内の駐車場南東部に所在する(20)。川西の宝篋印塔と同様に六段式基礎だが、同塔に比較すると残りが悪く、基礎部はしっかりと残存しているが、その上に乗るのは侵食をうけた痛ましい塔身で、笠部はなく、塔の傍らに相輪の下部のみが残されている。今回、この相輪下部も図化した。また、同寺内の本堂裏の石造物が集積されている場所に、巨大な宝篋印塔隅飾りが一点存在する(21)。川西の宝篋印塔と同様に基礎最下段に銘文が六行に渡り彫られている。

寶篋塔
文保□□□（三年□）
□月□□（四月十日）
大願□□（主□）
□□（造立）
遍照金□（剛）

銘文の状態も現状かなり悪くなっており、□の表記は文字の存在は確認できるが不明、後に（）表記をしたものは、以前は読めたが現在では確認できないことを示す(22)。文保三年とすれば西暦一三一九年、川西の宝篋印塔が造立されて五年後である。川西の宝篋印塔と共通点が多く、銘に遍照金剛とあることから真言宗に帰依

した人物が造立したと考えられる。今回の調査での新知見として基礎の北東部角の基礎の上から三段目に、他の切石とは違うブロック状の切石があり、ここが納経孔として機能した可能性が指摘できる。このように石塔の基礎部の一部で石材が取り外し可能な構造を呈しているものについては、狭川真一氏が滋賀県千原神社宝塔（文保三年（一三一九））、滋賀県兵主神社宝塔（鎌倉時代後期）を報告しており（狭川一九九四）、時代的にも近いこの宝篋印塔も同様な構造と考えられる。その機能は納骨もしくは、川西の宝篋印塔の事例を踏まえると納経の可能性が高いと考える。現状でこの石塔はかなり毀損が進んでいることと、設置されたいる基礎の石組みが緩んでおり、石塔が傾いている状況が見てとれた。早急な保全が必要と考えられる。またその価値についても今回の実測図の検討により、石塔の規模が川西の宝篋印塔と同等の巨大な宝篋印塔であったことが明確となり、再考すべきと考えられる。

③三郎丸吾平山観音堂宝篋印塔（図版四、十二） 熊本県山鹿市菊鹿町五郎丸

山鹿市の東部、五郎丸地区の奥に三郎丸という地域がある。その観音堂で基礎を上下逆にして、手水鉢として再利用されている宝篋印塔の基礎である[23]。山鹿市に合併前の菊鹿町の段階では注目されていたが（菊鹿町一九七八）、その後の町史編さん時にその存在を忘れて現在に至っていたと思われる（菊鹿町一九九六）。今回、改めて調査が出来たことは率直に言って、良かったと思う。

④相良観音寺元泉水宝篋印塔（図版四、十二） 熊本県山鹿市菊鹿町相良

②の東に隣接した民家の庭に所在する宝篋印塔で、近所の土産物屋である泉水園の猿渡幸憲社長にお話を聞くと、元々は相良観音寺境内地の泉水と呼ばれる場所にあったが、移動して現在地にあるとのことだった。記録によると民家の西側にあったとされるので、現在の泉水園の西側にあったのかもしれない。①・②に比べると小型化しており、六段式基礎の構成も大きく異なる。それは前者二基において六段式基礎がそれぞれ別石だったものが、この塔では二段を一石で造り、それを三つ重ねて六段式基礎を構成していることに型式の変化が確認できる。また相輪部には別の小型菊鹿型宝篋印塔の笠部が据えられている。

⑤平重盛供養塔（亀井家宝篋印塔群）（図版五、六） 熊本県鹿本町御宇多

山鹿市の中心部の平野の北東部にあたり、御宇田遺跡が所在する丘陵の南側に位置する。民家の東側に位置し、宝篋印塔が三基並ぶ。便宜上、南から見て、左塔、中央塔、右塔とする。前稿（髙橋二〇二三b）では、基礎の分割差から左塔が古く、次に中央塔、最後に右塔と考えたが、今回実測を行い詳細に観察したところ、中央塔が古く、左塔が続き、一番新しいのが右塔と考えを改めた。この石塔群で注目されるのは、型式変化がしっかり追える点である。六段式の基礎が、川西の宝篋印塔や元吾平神社の基礎が六段それぞれ別石だったのが、ここで省略が行われており、最終的には六段が一石になるもの、また塔身に笠部段形二段がつくものが右塔で確認できる。寺尾野宝篋印塔と同じ典型的菊鹿型宝篋印塔の要素がここで

すでに出ていることがわかった。

⑥寺尾野宝篋印塔（図版七）熊本県指定重要文化財（天授四年（一三七八）

熊本県菊池市龍門

菊池市北東部、竜門ダムの麓に寺尾野集落がある。この集落のほぼ中央部に、西の山麓から伸びる斜面があり、その裾部を造成して大日寺が建てられていた。現在、寺尾山大円寺が同地にある。寿永年間（一一八二～一一八四）に文覚上人の建立と伝わる。道路脇の一段高い畑の一角に宝篋印塔があり、コンクリート塀が巡らされて整備されている。全高は約二・三m。基礎から相輪までが完存する貴重な石塔である。塔身の隅に、「天授二二（四）年　卯月日　蓮忍」の銘文があり、建立年代と建立者がわかる点でも歴史的価値が高い。現状、基礎部二段分が地面下に埋まっている。

また菊鹿型宝篋印塔が山鹿市エリアから菊池市エリアに移り建てられた初現の石塔として注目され、定型化した菊鹿型宝篋印塔としても重要である。

三．菊鹿型宝篋印塔の編年案（図八）

前章で紹介した菊鹿型宝篋印塔の各要素を検討し菊鹿型宝篋印塔の成立から型式的安定期までの編年案を提示した。これは祖型を含めて、川西の宝篋印塔が造立された十四世紀初頭から後半までのものである。基礎部の分割が省略されていくほど新しいと考えている。検討の結果、最終的には六段基礎を一石で作るようになることがわかった。

四．菊鹿型宝篋印塔の誕生背景について

さて、菊鹿型宝篋印塔について長く述べてきたが、そもそも菊鹿型宝篋印塔という独特のこの形はどのような背景のもとに成立したのかは過去誰も指摘していない。そこで、今回、石塔の構成要素からこの石塔の成立を考察してみたい。

菊鹿型宝篋印塔として初現と考えられる川西の宝篋印塔はその巨大さにまず目が引かれるが、他の一般的な宝篋印塔と比べると以下の点で川西の宝篋印塔独特の特徴が見受けられる。

①一般的な宝篋印塔では、長方形の基礎石に格狭間があり、基礎石の上部には通常、段形を二段作り出す。しかし、菊鹿型宝篋印塔ではいわゆる基礎石がなく、通常の宝篋印塔に見られる二段の段形の下に連なるように連続した段形が続き、合計六段の段形が基礎部となる。

②一般的な宝篋印塔では笠部の下に通常二段の段形を有し、笠部と一体的に成形される。しかし、菊鹿型宝篋印塔ではこの段形二段が当初より笠部から独立して別石である、なお時代が下ると、塔身側上部と一体化する。

③石塔の構成石材がすべて別石で作られている。

④隅飾りが馬耳風に立ち、縦に三つ決りが入ったデザインとなっている。

これらの特徴の祖型があるとすればどこに見いだされてるのかが問題となる。一・cでも触れたように川西の宝篋印塔は九州島内の宝篋印塔でも比較的初現に近いものと考えられている。それよりも早

いと考えられるものは、清水磨崖仏群中の三大宝篋印塔、その同型と考えられる下山田鳥越宝篋印塔（図版九）や、他には大分県深田宝篋印塔、長崎県南島原市茸山宝篋印塔などが挙げられる。今回それらを比較することで興味深い成果があった。以下、列記する。

宝篋印塔の特徴について

1）隅飾の大きさ
　a小型
　b大型
2）隅飾の構造
　a別石
　b一石形成
3）基礎の構造
　a多段式
　b一般的な基礎石
4）笠部下部の構造
　a別石
　b一体
5）笠部上部の構造
　a階段式
　b屋根式

以上の要素で比較した結果、九州宝篋印塔の初現期のものは互いの影響が認められることがわかった。隅飾が小型なものは、清水磨崖仏群中の三大宝篋印塔、下山田鳥越宝篋印塔、深田宝篋印塔と共通点が確認できた。また笠部上部屋根型は、これは清水磨崖仏の宝篋印塔、下山田鳥越宝篋印塔に見られるが他には見受けらない。清水磨崖仏宝篋印塔と下山田鳥越宝篋印塔の所在は、図版十に位置図を提示している。

川西の宝篋印塔一番の特徴である六段式基礎だが、これは清水磨崖仏群中の三大宝篋印塔の影響があったのではないかと推定する。清水磨崖仏はその名前のとおり巨大な崖面に線刻されたものだが、図八のように、壁面への線刻ということもありデザインが単純化され、直線が多くなっている。石塔の一番下は基礎石と意識されて格狭間を彫られているが、その上には直線的に長方形の枠が連続している。これは下山田鳥越宝篋印塔にも通じるデザインである。本来、宝篋印塔の基礎部の格狭間は藤澤典彦・狭川真一両氏が解説しているように台座の布飾りのイメージだと思うが、清水磨崖仏群中の三大宝篋印塔は、直線的な方形段のイメージが連続している。これを省略しながら発展的にそのまま継承したのが川西の宝篋印塔の基礎だと考えている。川西の宝篋印塔のデザインの担当者（僧侶か）は基礎石とその上の段形の意味を同じものと理解して、段形を連続させたのではないだろうか。

ここで特に注目したいのは、下山田鳥越宝篋印塔と川西の宝篋印塔の別体式の隅飾りについてである。藤澤典彦・狭川真一両氏が「石製の隅飾りは、背面がどうしても瘤のようになる。銭弘俶塔の影響を受けている場合は瘤になるけど、宝篋印塔には高野山の奥之院[24]から出土した金属製の宝篋印塔や、福島県いわき市金光寺でみつかった木製の宝篋印塔のように、隅飾りが板碑状のものもあるのです。（藤澤・狭川二〇一七）」と指摘している板状の隅飾りが下山田鳥越宝篋印塔と川西の宝篋印塔に共通して見られる[25]。図版

十一で前述した宝篋印塔の隅飾りの祖型についての参考の画像を提示する。

あくまで想定だが、菊鹿型宝篋印塔の成立までの仮想モデルを提示しておきたい。

①鹿児島県の清水磨崖仏周辺に、おそらく畿内より金属製、もしくは木製宝篋印塔が持ち込まれた。石造宝篋印塔は重いため、旅などでの携帯には不向きだが、金属製や木製であれば、遠方からも搬入が可能であったと推測する。関西から下向した武家が保持していた可能性はないだろうか。年号が分かる高野山奥之院金銅製宝篋印塔の年代から考えると、時期的には同時期かその後、つまり一三世紀の第3四半期段階としたい。

②この石造製ではない宝篋印塔をモデルに、下山田鳥越宝篋印塔が複数（最低2基以上）作成された。年代は清水磨崖仏宝篋印塔の以前もしくは同時期とすれば、推定でしかないが一二八〇～九〇頃か。

③下山田鳥越宝篋印塔をモデルに、清水磨崖仏の宝篋印塔が彫られる。これは永仁四年塔（三十五日、四十九日供養塔）から一二九六年に彫られたことが分かっている。笠部最上部が段形でなく、屋根表現（四注形）も共通している。この屋根表現は、奈良県北東部の古手の宝篋印塔に見られる特徴であるが、その評価については意見が分かれている[26]。

④清水磨崖仏の宝篋印塔を参考に、川西の宝篋印塔が正和三年（一三一四）に製作された。これが菊鹿型宝篋印塔の誕生と考える。その際、巨大な隅飾りは京都の宝篋印塔の影響を考えておきたい[27]。

また隅飾りの三弧文はパルメット文様を起源に持つ山鹿地域での古い宝塔に見られる文様が採用されている。また銘文からも真言宗の僧侶が深く係っており、相良寺及び周辺寺院がどのように関連したのか、興味が尽きない。全国的にも珍しい地域色が強いこの宝篋印塔は、以後、中世を通して製作され、近世初頭まで存続したと考えている。

おわりに

本稿の新規性としては、菊鹿型宝篋印塔を定義付け、個々の石塔を実測しそれぞれを比較したこと、またそれらの型式変遷に注目して編年案を作成したことが挙げられる。現在の山鹿市地域で誕生した菊鹿型宝篋印塔は、菊池市を中心として熊本県内の一定の地域で地域色を持ってその分布を広げ、中世後期にかけて隆盛することになる。本稿ではその誕生から展開までについて、石造物を形態から分析することに先鞭をつけることが出来たとは思うが、なぜそのようなことが起こりえたのかという社会的な背景についてはまだ考察が進められていない。また、併せて菊鹿型宝篋印塔の展開から消長までも含めて、今後の課題としていきたい

本稿を執筆するに際して、下記の方々よりご教示・ご協力を頂いた。文末に記し、感謝を申し上げる。
朝岡俊也・池田朋生・上床真・大重優花・河野摩耶・狭川真一・猿渡幸憲・佐藤亜聖・柴田亮・関森想・濱邉空・美濃口雅朗・桃﨑祐輔・宮崎歩・相良寺・川西区・五郎丸区・泉水園・栄屋旅館・菊池

市教育委員会・山鹿市教育委員会・地権者の皆様（敬称略）

註

（1）宝篋印塔もその素材により、金属、木、石と多様だが、本論中、以後特に説明を行わない場合は石でつくられた石造宝篋印塔を単に宝篋印塔と表記する。

（2）菊鹿（きくろく）型宝篋印塔とは、一般的な宝篋印塔とは明らかに違う特徴を持った熊本県北部、特に山鹿市と菊池市を中心に分布している宝篋印塔の名称である（髙橋二〇二三b）。山鹿市と菊池市に分布の中心があるため、菊鹿型としているが、現在、山鹿市に菊鹿（きくか）という地名があるため、誤解を防ぐために敢えて菊鹿（きくろく）と称している。この宝篋印塔は当初その特徴から多田隈豊秋氏により、「六段式宝篋印塔」と命名されたものである。多田隈氏によれば「基壇が六段。二石又は三石より成り、再下段より最上段までその高さはわずかな差で漸次しながらも、（略）ほぼ同じ高さのものを積み上げている。蓋石の四隅に刻出された馬耳形隅飾は三弧式をとっているが、弧と弧の間に稜角を降だし、その間を匙形にしゃくっている」としている（多田隈一九七五）。その後、前川清一氏により塔身の分類で、菊鹿型塔身という呼称を与えられた（前川一九九五）。前川氏は熊本県山鹿市・菊池市を中心に四十三例を報告し、分布の北限は福岡県八女郡の三例、南限は熊本市の一例を上げている。紀年銘資料は二十三例で正平十六年（一三六一）から天正十二年（一五八四）が確認されており、おおよそ、十五世紀中頃～十六世紀としている。この点でわかるように、私が定義した菊鹿型宝篋印塔の典型が成立した以降に、当たる例を挙げられていることがわかる。さて、前川氏はこの塔身に二段の段形がつくものを、段形が上部に付くとⅠ型、下部につくとⅡ型と分類している。ちなみにⅠ型は三十九例、Ⅱ型は四例を確認されている。但し、個人的見解だが塔身への銘入れ自体が後からの行為と考えており、Ⅱ型は本来上部に段形があったものを刻字の時点で天地を間違えているのではないかと想定している。また、このことからも塔身への刻字行為自体が石塔に当初からされていたのではない証左になる可能性もあると考えている。勿論、全てが後刻ではないかもしれないので、調査が必要である。その後、研究の進展は滞っていたが、美濃口雅朗氏により熊本城飯田丸石垣出土石造物の菊鹿型塔身の分析を進めるなかで資料紹介を行っている（美濃口二〇一七）。興味深いのはその出土資料は紀年銘「至徳元年」（一三八四）と古いことや、塔身上部につく段形も三段と特異な姿をしていることである。塔身につく三段の段形はいまのところ他の資料には見当たらない。他の古い型式が二段を遵守していることを考慮すると、この資料自体が特異なのかもしくは新しい段階でのバリエーションか、年号については他の菊鹿型宝篋印塔であるように古い年号が追刻された可能性が考えられるのではないだろうか。また美濃口氏の報告により前川氏の事例に新規に三基の事例を追加されている。原田昭一氏は九州の宝篋印塔の展開期に、いわゆる六段式基礎を持つ宝篋印塔は、熊本県山鹿市川西の宝篋印塔（正和三年（一三一四）銘）から菊池市寺尾野宝篋印塔（天授四年（一三七八）に繋がり、戦国期に至るまで熊本県北部で流行したとする。また、原田氏はこの特徴的な宝篋印塔を菊池氏に関係すると位置づけている。それは大智という僧が、鎌倉時代末～南北朝時代初期に菊池氏の要請により、菊池市の山深い聖護寺に入山し、後に玉名の広福寺に移り、曹洞禅を広めた地域にちょうどこの宝篋印塔が展開していると原田氏は説明している（原田二〇一二）。僧大智の庇護者である菊池氏の勢力圏で、禅宗の教線拡大が行われた地域と鎌倉時代末～南北朝時代の宝篋印塔の分布域が重なることがその証左とするが、詳細な検討が必要と考えている。

（3）歴史的な経緯上、塔＝仏塔を示す用語なのだが、次第に高い建物のことも塔と言うようになったため、本論では塔を仏塔と称している。

（4）中国では宝篋印塔ではなく阿育王塔と称す。

（5）中国、十国呉越の第五代の王で、同国最後の王。仏教振興に努めた。

（6）中国では金塗塔と称す。

（7）四面像　銘文（茨城県立歴史館一九九〇）

〈基壇正面〉「大周／天和／六年／歳次／辛卯／□月／廿八／仏弟／子今／□□」

〈同右側面〉「王為／七世／父母／現在／居眷／□□／四面／仏像／一区」

〈同背面〉「願皇／帝□／歳臣／佐千／秋因／縁眷／属成／登正／覚一」

〈同左側面〉「□□／□□／生□／同福／利」

（8）このパルメット形の文様に関しては佐藤誠氏が論考（佐藤二〇一一）に纏めている。それによると、佐藤氏が提唱する九州様式石塔の請花部のレリーフは中国山東省雲崗石窟などの影響を受けている可能性を指摘している。雲崗石窟の仏像様式が西方の影響を強く受けていることもあり、パルメット文様の流れは理解できる。ちなみにパルメット文様の原型はナツメヤシの樹形が祖型と言われており、そのルーツは西アジアにあるとされている。ナツメヤシ自体は寒さに弱く、乾燥に強いので西アジアでは生育するが、東アジアでは生育が少ない。ナツメヤシの文様としてのモチーフが東に伝播したもので、中国から朝鮮半島そして日本に伝わってきた際にはおそらく元の植物のイメージはなく、抽象化された文様になっていたのだろう。なお羽根状に見えるのは半分のパルメット、いわゆる半パルメットであり日本でも瓦の瓦当面に多く使われている。

（9）この件について石造美術研究の大家であった川勝政太郎氏は著作（川勝一九七八）において、下記のように記述している。

「鎌倉時代中期にはじめて登場する宝篋印塔の形の源流は、中国の銭弘俶の金塗塔にあるが、それを簡略化してわが国の宝篋印塔は独自の発展をしめすのである。」

日本の石造宝篋印塔の起源については概ねこの説が主流となり、その後、藪田氏は著作（藪田一九八八）において宝篋印塔の起源について、金塗塔（銭弘俶八万四千塔）が起源であることを強く主張していった。同著作の「七　結論」で、下記のように記述している。

「（七）鎌倉時代に入って、石材加工技術の進歩発達によって金塗塔形は小塔の域を脱して大型化し、石製品となり、前代から存在する五輪石塔その他形式の石塔と共に念仏聖の布教の道具として全国的に大流行した。」

（10）京都の宝篋印塔の特徴は、巨大な隅飾りであることは良く知られている。高山寺宝篋印塔から続くこの伝統は一四世紀前半の段階でも誠心院型宝篋印塔の特徴として存在している。

（11）川西の宝篋印塔や元吾平神社宝篋印塔も隅飾は別石造りである。ただし、前者二つの別石はかなり大きいが、深田宝篋印塔の場合は塔のサイズからするとずいぶんと小振りである。この小振りな隅飾は、南九州の初期宝篋印塔である清水磨崖仏群内の大型宝篋印塔三基に共通するものである。塔身と笠部段形の一体化は菊鹿型宝篋印塔の初期から中期にかけて前川氏が菊鹿型塔身と称した、塔身の上部に笠部下の段形二段が一石で構成される特殊な姿に通じるものがある。また初期の宝篋印塔として著名な京都高山寺宝篋印塔の二基も笠部軒の上の段形は計五段あるが、上部三段が一石でその下二段が一石である（藤澤・狭川二〇一七）。深田宝篋印塔は塔身と一石である笠部軒の上五段は、上部二段が一石で下三段が一石で構成されており、段数の差異はあるが共通性がうかがえる。

（12）その経の種子としてタラークを用いている。ほかに、熊本県熊本市植木町円台寺石造笠塔婆（建久七年（一一九六）銘）、大分県豊後高田市磨崖仏曼荼羅（平安時代末～鎌倉時代初期推定）があげられている。両方とも天台宗。

（13）清水磨崖仏

・永仁四年二月二十八日宝篋印塔の銘文

「右奉為相當［三十五日御忌□比丘尼清浄御］出離生死」、

「往生極楽［　　］」

［［永仁二］二年、大才、丙申、二月廿八日　平家幸、敬白」

・永仁四年三月十三日宝篋印塔の銘文（墨書、刻銘）

「右奉為相當四十九日御忌□比丘尼清浄御出離、

生死往生極楽乃至法界平等利益□□□□」

「永仁四年、大才、丙申、三月十三日平重景、敬白」

どちらも同一人物である□比丘尼清浄の死後三十五日供養と、四十九日の供養のために建立されたものと考えられている。ここで、施主として平家幸（いえゆき）と、平重景（しげかげ）が彫られている。この平姓の二人は、鎌倉時代時代前期にこの川辺の地に移り住み地域を支配した河邊平氏の一員と考えて良いだろう。

(14) 茸山宝篋印塔は実見が出来ていないため、あくまで大石氏の記述から判断することになるが、笠部の段形、隅飾りなどすべて一石でつくられていることからも、九州の初期段階の宝篋印塔とは考えがたい。本文中で述べた他の宝篋印塔は笠部に注目しても一石ではなく、別石造りが主体である。この宝篋印塔の年代観だが、鎌倉時代後期でも末に近い印象であり、南北朝に入ってもおかしくないと感じた。この石塔については、佐藤氏も相輪部の文様検討においても、鎌倉時代後期末～南北朝初頭の年代観である（佐藤二〇一五）

(15) 地元の話では、元々は玉専山妙覚寺の境内に建っていたと伝えられているが、この妙覚寺について詳細は不明だが、『山鹿郡地誌』を引いた『菊鹿町史』資料編によると川西宝篋印塔の北西部にあったとされる。現在の相良観音ほどの大きな寺であり、内田相良氏関係の寺とされている。この寺域内に川西宝篋印塔はこの寺域内にあったと伝わっており、現状の状況は水田で囲まれたなかで佇んでいる。地元の人々は、水田から盛り上がった四面の土壇上を塔本（とおんもと）、石塔を塔（とう）さんと呼んでおり、「この地を開墾すれば、腹がせく（腹が痛くなる）」という言い伝えが残っている。また、毎年三月二八日には塔の前で「塔さん祭り」の供養が行われるなど大切に守り続けれられている。

(16) 明和九年（一七七二）に肥後熊本藩士軍学師範であった森本一瑞が肥後熊本藩士で郷土史家であった成瀬久敬の「国志草稿」を踏襲し、新しく社寺縁起や古城の由来などを増補した地誌である『肥後國誌』上巻山鹿郡中村手水の島田并山ノ井の箇所の補に、古塔調査録を引用している。天明四年（一七八四）の寺本直廉の『古今肥後見聞雑記』（『肥後國地誌集』収録）にも取り上げられている。ここでは、「下内田村之東之畑之中に如経塔大き成塔有り。台石に銘あり」、として銘文があげられている。これは現在見られる銘文と同じである。塔の高さは、壱丈とあり三m程度と捉えられている。次に、昭和二八（一九五三）刊行の『熊本県史料集成』七巻（再録　熊本女子大学郷土研究所編一九八五）では、全体的な形をスケッチとして載せているのと、銘文に関して詳細に記載している。この調査段階で、すでに隅飾は二点しか残っておらず、笠部の上部以上は存在していなかったことがわかる。また備考で、銘文の人物が分からないことを述べている。

(17) 今回、実測図上で復元すると、三九四cmとなった。

(18) 塔身は四角形で無銘。西面上部に半円形で五cm程度の穴が穿ってあり、その穴から確認すると塔身内部が刳り抜かれて空洞であることがわかる。古老の話の伝聞では、奉納孔から経巻の紙や布切れがわずかではあるが、引きずり出されたという。これらは残念ながら現存していない。しかしながらこの話から川西の宝篋印塔には納経が行われていた可能性が高いと考えられる。

(19) 菊鹿町一九七八では、「内田相良氏の五代又は六代の人の法名であると思われる。」と記載されている。

(20) 『相良の史跡』二〇二三

相良文保宝篋印塔の記述

明治二十二年の「明治熊本地震」で上層部の幾層かが倒壊した。昭和四十年頃

まで、吾平神社前にあった。この石塔の周りで子どもがよく遊んでいた。泉水園猿渡氏曰く、吾平神社前が三叉路になっており、その中にこの塔はあった。元々も高い基壇の上に石塔は置かれており、子どもは見上げるぐらい大きかったとのこと。道路改良工事により撤去されこの場所に移設された。

(21) この巨大な隅飾りが近接する元吾平神社篋印塔に属すか、それとも川西の宝篋印塔の物か、ほぼ同じ規模の宝篋印塔であり、大きさからは明確にできない。ただ、地理的に数km離れていることもあり、吾平神社宝篋印塔のものと現時点では考えておく。

(22) 現地で観察すると、たしかにわずかに十の横棒の一部を確認できた。

(23) 菊鹿町一九七八では、「三郎丸吾平観音宝篋印塔」という名称で、「川西及び相良と共に三兄弟と云われるが破壊されて笠石を手洗(水盤)に改造されている。」と記載されている。今回、調査時に観察をしたが、笠石ではなく六段基礎の分割パーツだと思われる。地元の方にお話を伺ったところ、「この観音堂に祀っている千手菩薩は、相良観音のお母さんに当たる。また、宝篋印塔は本来完存していたが、相良寺に持っていかれたので、残骸が残っているのだ」ということであった。あくまで言い伝えではあるが、この観音堂と相良寺との昔からの繋がりを感じさせるエピソードと感じた。ただ、基礎部が六段の個別別体式から四段一体となっているため、時期的には下るものと考えている。

(24) 重文金銅宝篋印塔(金剛峯寺) 高野山奥之院御廟の垣内に向かって、左後方付近の土中から明治時代末期に発見された金銅製宝篋印塔である。宝篋印塔の塔身には金剛界四仏の種子があらわされ、基壇には「大師入定奥院埋土中安置高野山八葉峰上南保又二郎入道遺骨也弘安十年(一二八七)六月二十二日卒」との遺骨者南保又二郎入道の銘文が彫られている。

(25) 隅飾りが板状になっているのは宝篋印塔としては古い様相(藤澤典彦・狭川真一二〇一七)

(26) 狭川氏は奈良県奈良市須川町神宮寺宝篋印塔の検討で、笠部上部の屋根形は当初は通常の宝篋印塔を製作する予定だったものをやむなき理由により、段形ではなく屋根形になったものと考察している(狭川二〇一九)。下山田鳥越宝篋印塔や清水磨崖仏宝篋印塔での屋根形はどう理解すべきか、今後の課題である。

(27) 同時代に隅飾りを巨大に作るのは京都宝篋印塔の特徴だが、その影響は瀬戸内海地方までは確認されている。九州での状況を今後考えていきたい。

引用・参考文献

相良地区地域活性化協議会 二〇二三『相良の史跡』

石田茂作 一九六九『日本佛塔の研究』講談社

茨城県立歴史館編 一九九〇『企画展 大阪市立美術館所蔵 中国の美術 ―彫刻と絵画―』茨城県立歴史館

大石一久 一九九九『石が語る中世の社会 長崎県の中世・石像美術』ろうきんブックレット9 長崎県労働金庫

大阪市立美術館編 一九七九『大阪市立美術館蔵品図録Ⅶ 山口コレクション中国石仏編』 大阪市立美術館

川勝政太郎 一九七八『日本石造美術事典』東京堂出版

川辺町教育委員会 二〇〇〇『川辺町文化財調査報告書(四)清水摩崖仏群』第二刷 川辺町教育委員会

菊鹿町教育委員会・菊鹿町文化財保護委員会 一九七八『菊鹿町文化財誌』

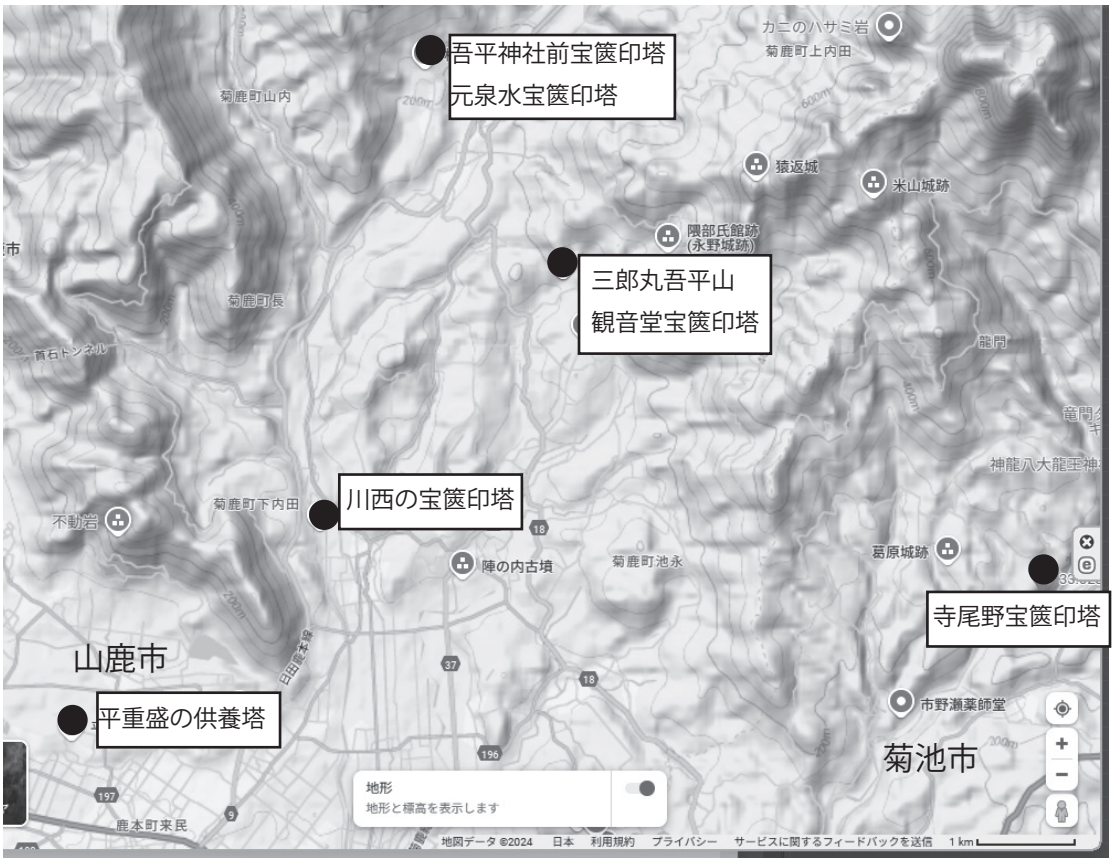
菊鹿町史編集委員会編 一九九六『菊鹿町史』本編 菊鹿町

菊鹿町史編集委員会編 一九九六『菊鹿町史』資料編 菊鹿町

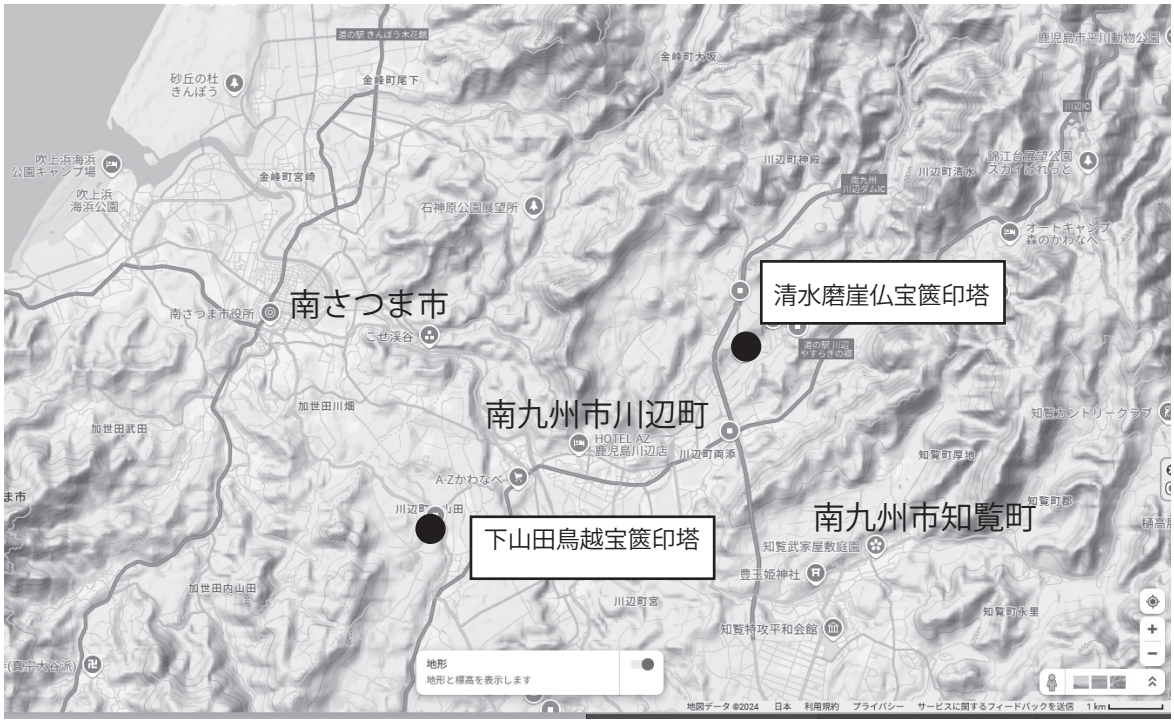
菊池市史編さん委員会編 一九九五『菊池市史 上巻』第二版 菊池市

熊本県立美術館編 二〇一九『日本遺産認定記念 菊池川二千年の歴史 菊地一族

の戦いと信仰』菊池川二千年の歴史展実行委員会
斎藤忠　二〇〇二『仏塔の研究―アジア仏教文化の系譜をさぐる―』第一書房
佐藤誠　二〇一五「九州様式石塔について―その源流、発生、展開及び分布について―（一）～（六）」『史迹と美術』第八五四号～第八六〇号　史迹美術同攷会
佐々木利三　一九八八「屋蓋四柱形の石造宝篋印塔について」『史迹と美術』五八八号
狭川真一　一九九四「付編　方形壇状遺構の性格について」『高雄地区遺跡群―高雄地区所在の埋蔵文化財報告書―太宰府市の文化財第二三集　太宰府市教育委員会
狭川真一　二〇一九「須川町神宮寺宝篋印塔実測記」『元興寺文化財研究所研究報告二〇一九』公益財団法人元興寺文化財研究所
史跡美術同巧会シルクロード学研究センター編　二〇〇七『シルクロード学研究二七　シルクロード学研究センター研究紀要　中日石造物の技術的交流に関する基礎的研究―宝篋印塔を中心に―』シルクロード研究センター
多田隈豊秋　一九七五『九州の石塔』上巻　西日本文化協会
多田隈豊秋　一九七八『九州の石塔』下巻　西日本文化協会
髙橋学　二〇二二「中世九州北部の石造物の地域性―石造層塔の分析から―」『日引』一七号　石造物研究会
髙橋学　二〇二三ａ「太宰府の文化財四五三　銭弘俶八万四千塔（原遺跡出土）」『広報だざいふ』２０２３．２．１（令和五年）太宰府市
髙橋学　二〇二三ｂ「石造物からみた菊池一族について―菊池市亘輪足山松林院東福寺を中心として―」『菊池一族解體新章』巻ノ三　菊池市
日本石造物辞典編集委員会編　二〇一二『日本石造物辞典』吉川弘文館
原田昭一　二〇一二「九州〈宝篋印塔〉」狭川真一・松井一明編『中世石塔の考古学―五輪塔・宝篋印塔の型式・編年と分布―』高志書院
藤島志考　二〇二〇「熊本における中世宝篋印塔の様相―宇土半島以北を中心として―」『福岡大学考古学論集３―武末純一先生退職記念―』武末純一先生退職記念事業会
藤澤典彦・狭川真一　二〇一七『石塔調べのコツとツボ　―図説　採る　撮る　測るの三種の実技―』高志書院
古川久雄　二〇〇一「「誠心院形」宝篋印塔と中世京都石工の動向―茨木市馬場教円寺と近江八幡市東川公民館宝篋印塔の調査から―」『実証の地域史―村川行弘先生頌寿記念論集―』大阪経済法科大学出版部
前川清一　一九九五『菊鹿の石造物』菊鹿町教育委員会
前川清一　一九九七『菊鹿の石造文化』肥後金石叢書Ⅲ　肥後金石研究会
美濃口雅朗　二〇一七「熊本城飯田丸出土の石造物」『熊本城調査研究センター年報３』熊本市熊本城調査研究センター
村田治郎　一九六九「中華における阿育王塔形の諸塔例」『史迹と美術』39－2　史迹美術同攷会
望月友善　一九七五『大分の石造美術』木耳社
藪田嘉一郎　一九八八『宝篋印塔の起源　続五輪塔の起源』第九刷（補考付）綜芸舎
吉河功　二〇〇〇『石造宝篋印塔の成立』第一書房



図版一　菊鹿型宝篋印塔　位置図（Google マップ利用）

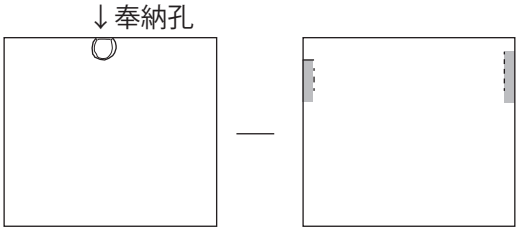


図版十　鹿児島県南九州市　関連石造物　位置図（Google マップ利用）

川西の宝篋印塔　全景

最下段の銘文の画像

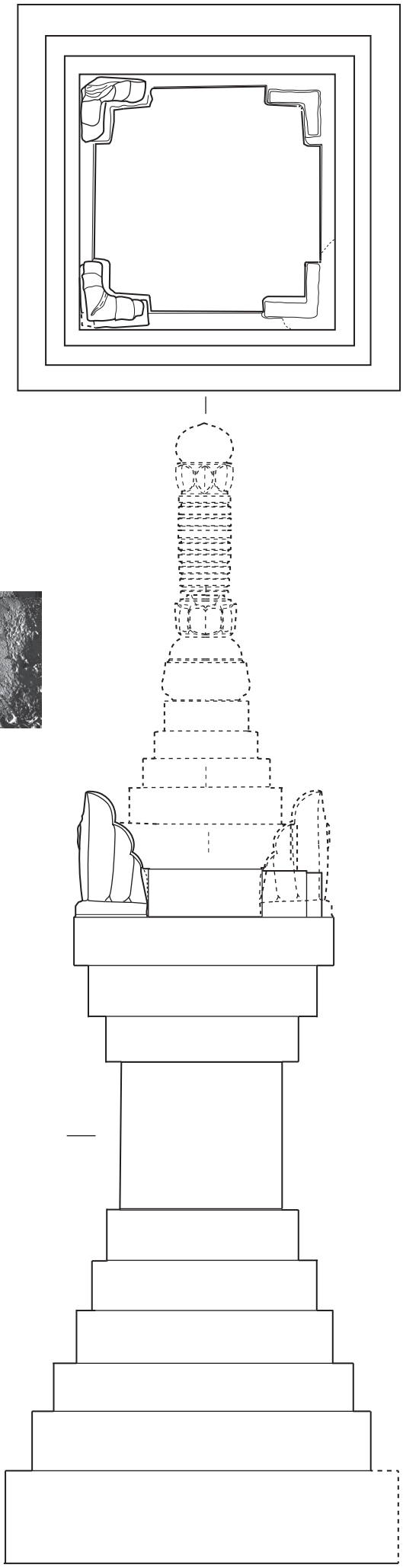
奉造立
寶篋印石塔
一基
正和三年歳次甲丑
三月廿八日
大檀那地頭
沙弥道妙
大法師位遍照金剛
真空
并真蓮尼



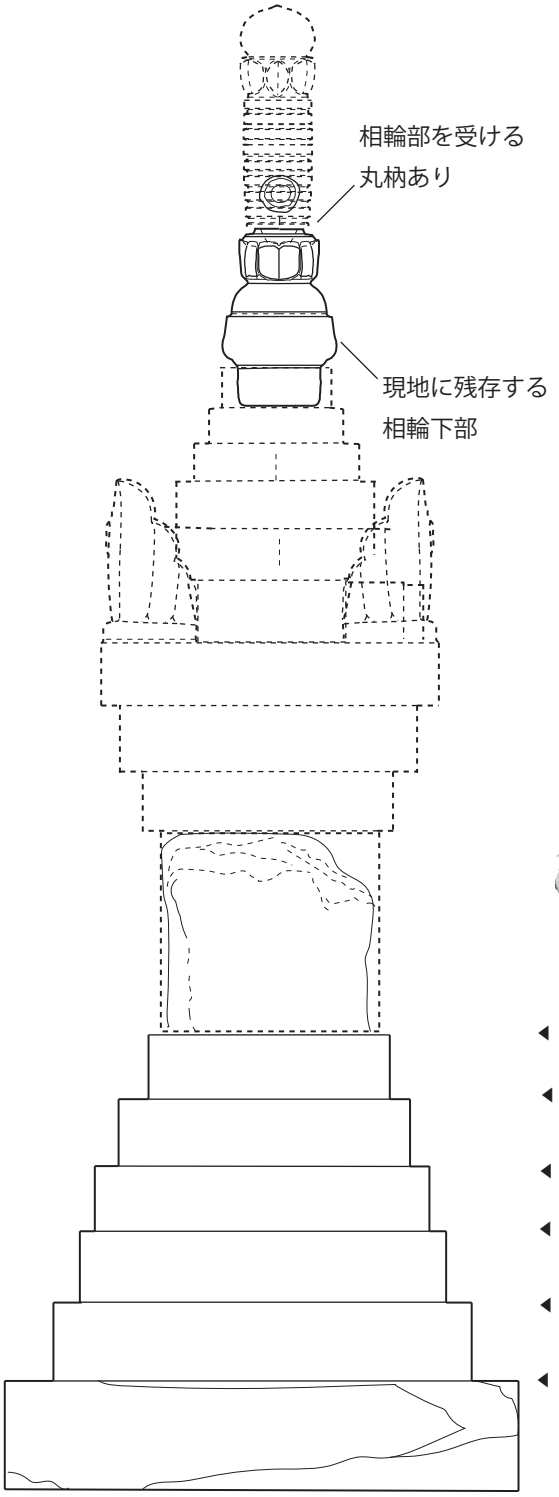
背面　　左側面断面

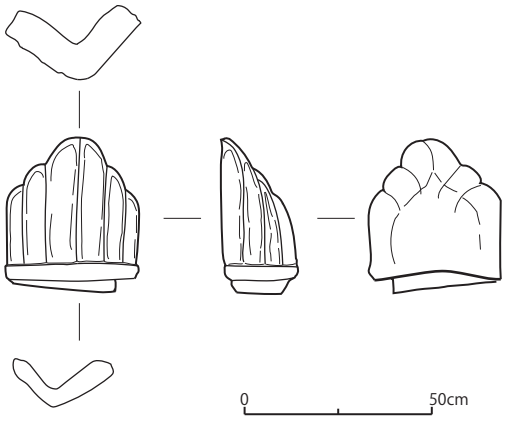
0　　1m

※笠部から上は元泉水宝篋印塔を参考に、
相輪上部は寺尾野宝篋印塔から推定復元している。

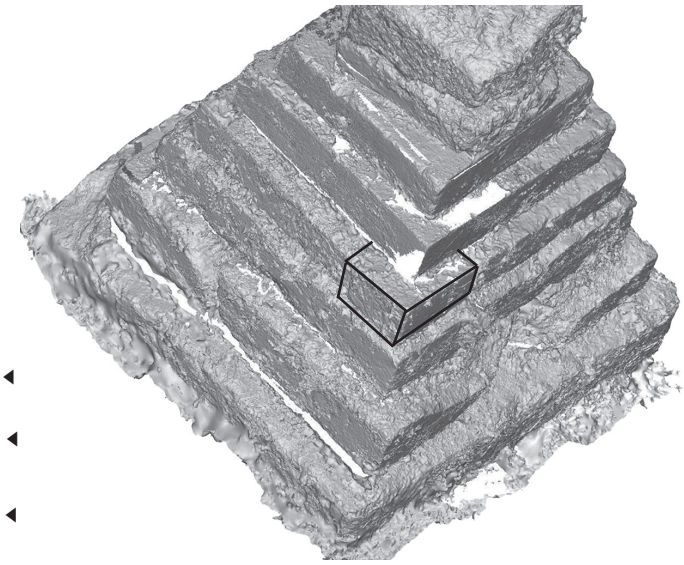


図版二　川西の宝篋印塔実測図（S=1/20）





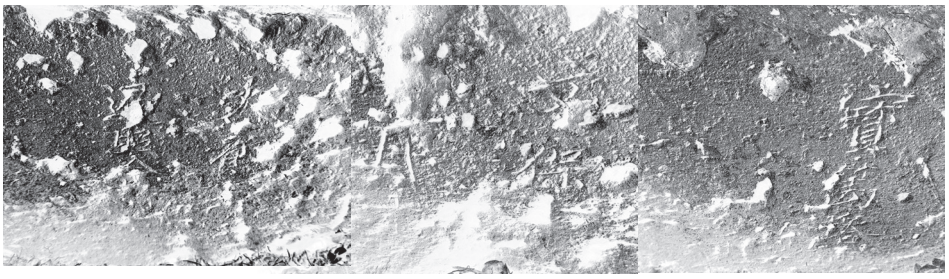
相良寺裏宝篋印塔隅飾り（S=1/20）



元吾平神社宝篋印塔　北西部ブロック状段形

0　1m

※笠部から上は川西の宝篋印塔、元泉水宝篋印塔を、
相輪上部は寺尾野宝篋印塔から推定復元している。

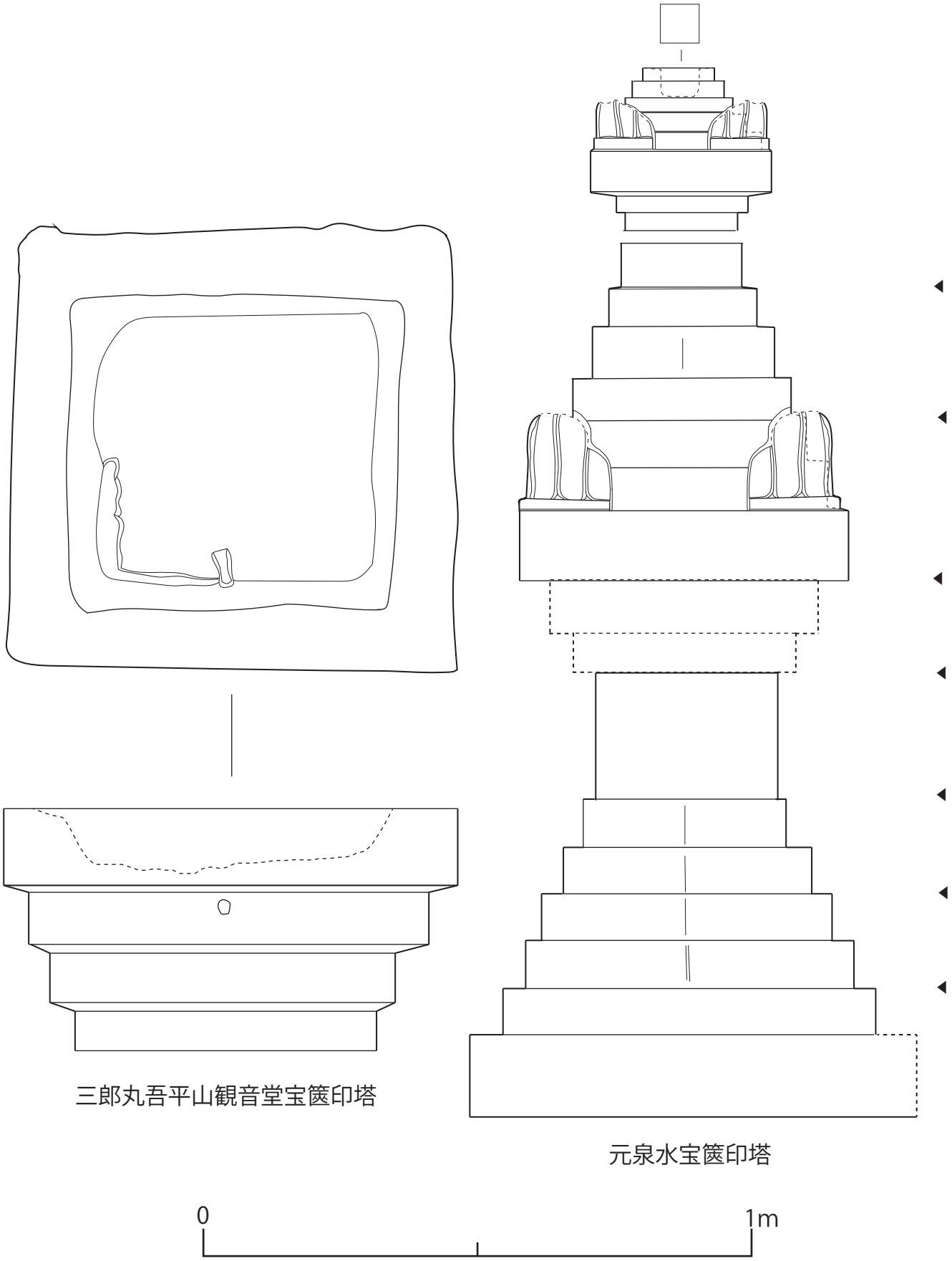


最下段　銘文画像（ひかり拓本による）

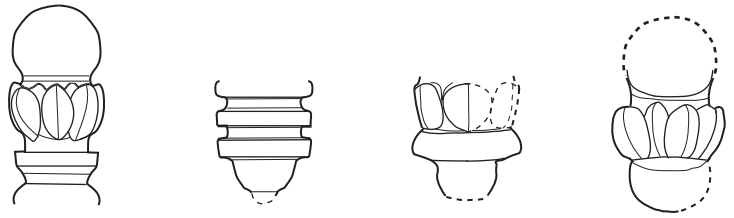
寶篋塔
文保□□□（三年□）
□月□□（四月十日）
大願□□（主□）
□（造立）
遍照金□（剛）

最下段　銘文釈文

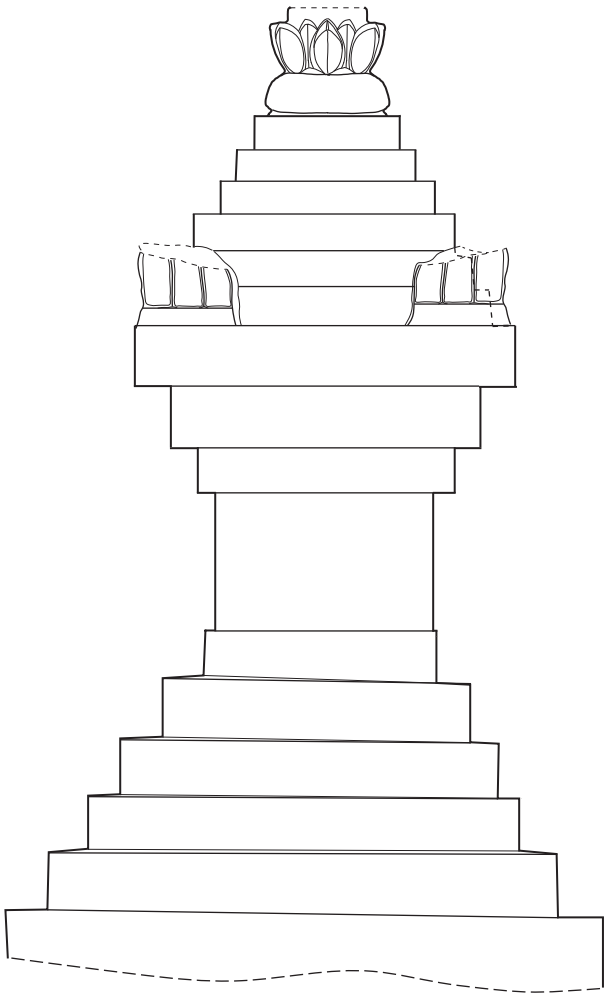
図版三　元吾平神社宝篋印塔・相良寺裏隅飾り　実測図（S=1/20）



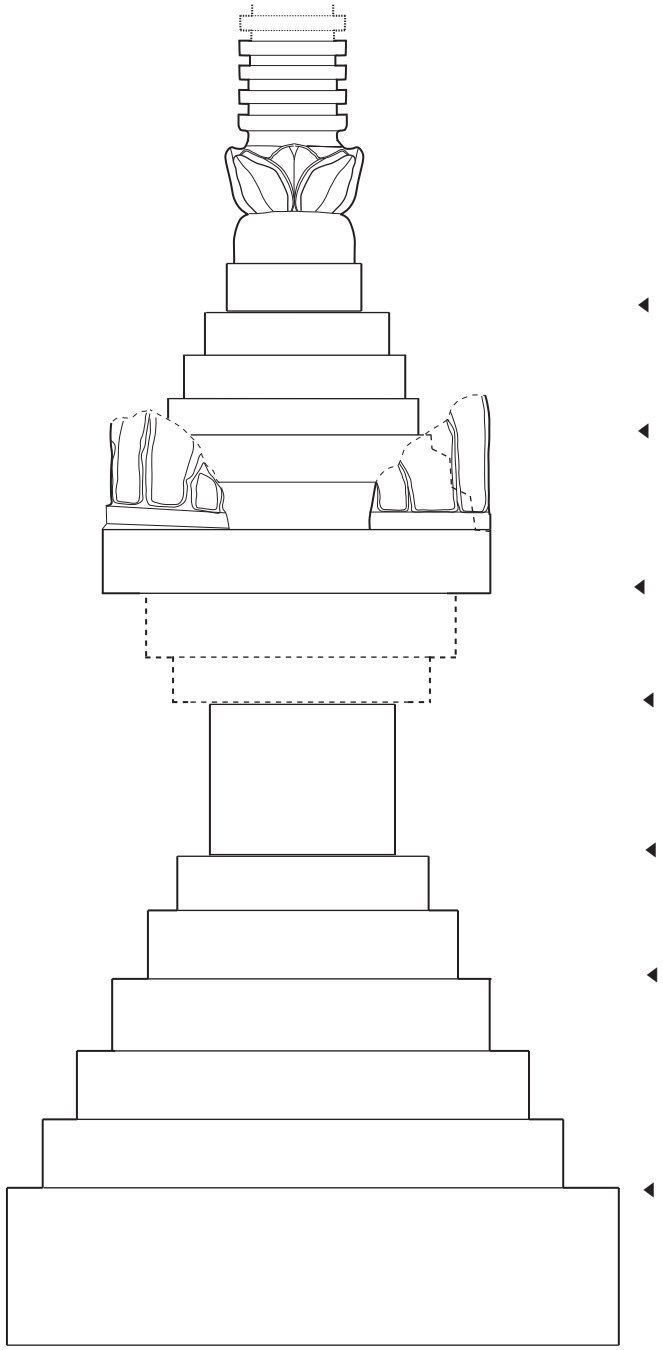
図版四　三郎丸吾平山観音堂宝篋印塔・元泉水宝篋印塔　実測図（S=1/10）



平重盛の供養塔（相輪群）



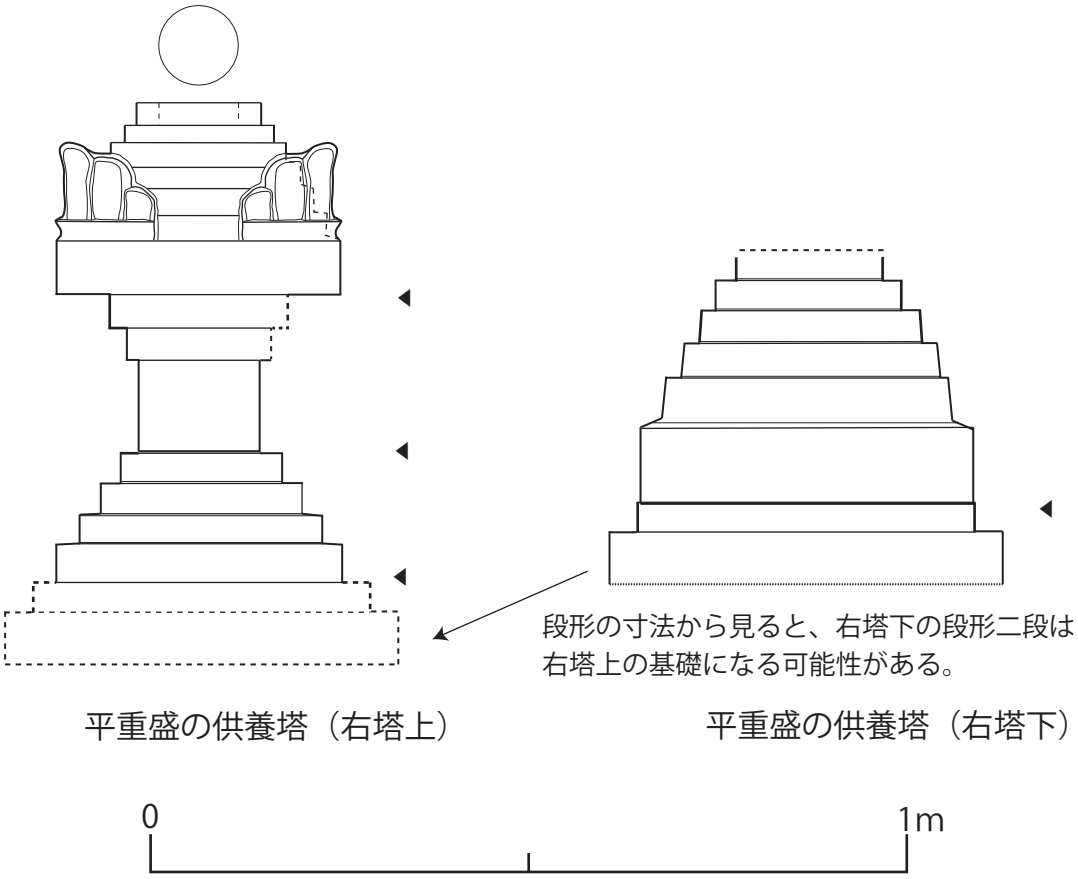
平重盛の供養塔（左塔）



平重盛の供養塔（中央塔）

0　1m

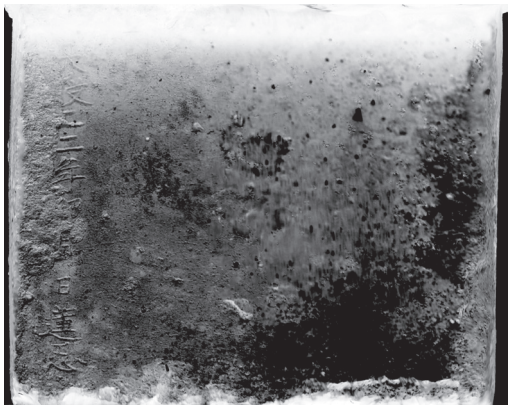
図版五　平重盛の供養塔（左塔・中央塔）　実測図（S=1/10）



図版六　平重盛の供養塔（右塔上・右塔下）実測図（S=1/10）

平重盛の供養塔（左塔、中央塔、右塔上・右塔下）　画像

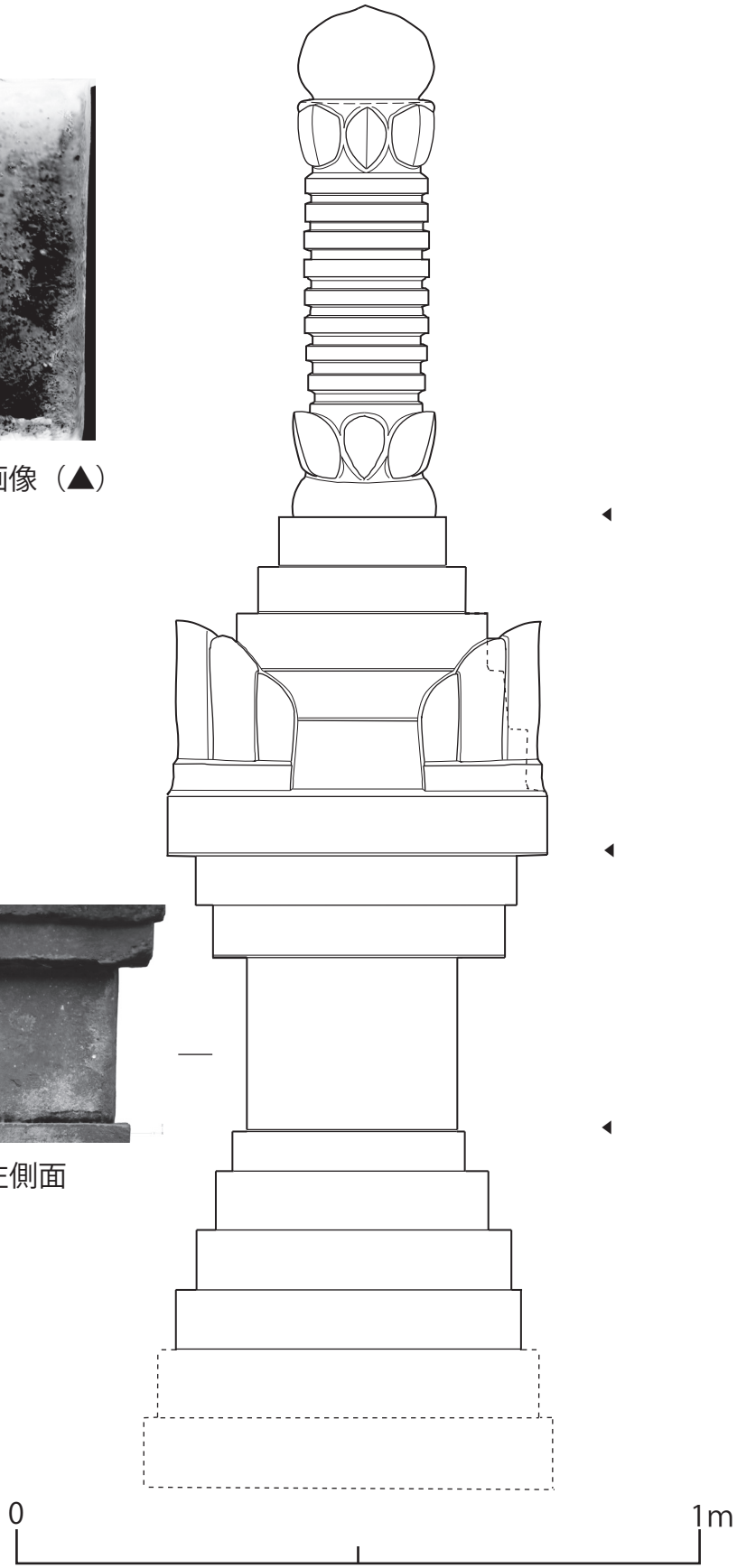
天授二年　卯月日　蓮忍



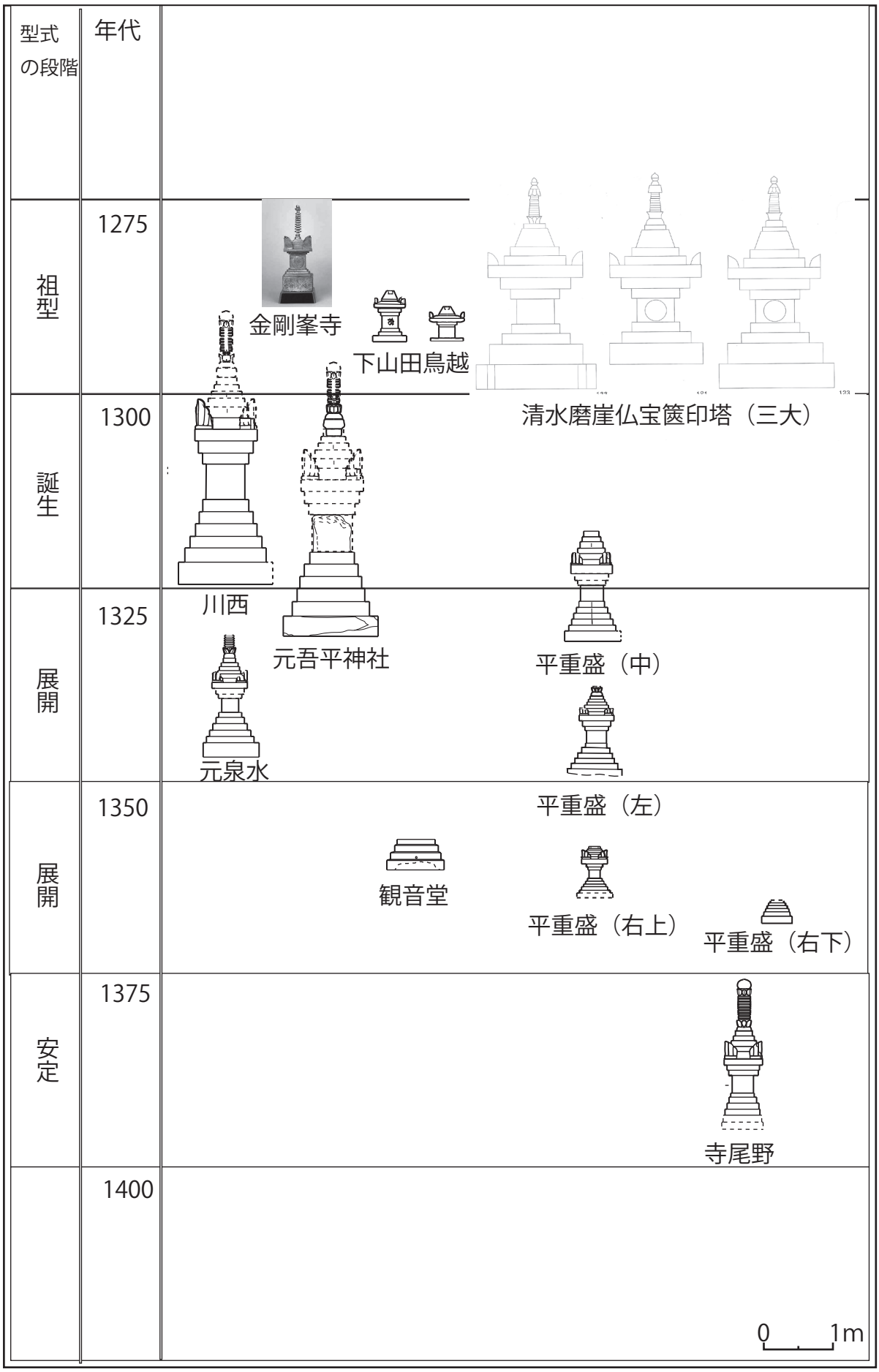
左側面　銘文部分詳細画像（▲）
銘文釈文（◀）

寺尾野宝篋印塔　全景

左側面

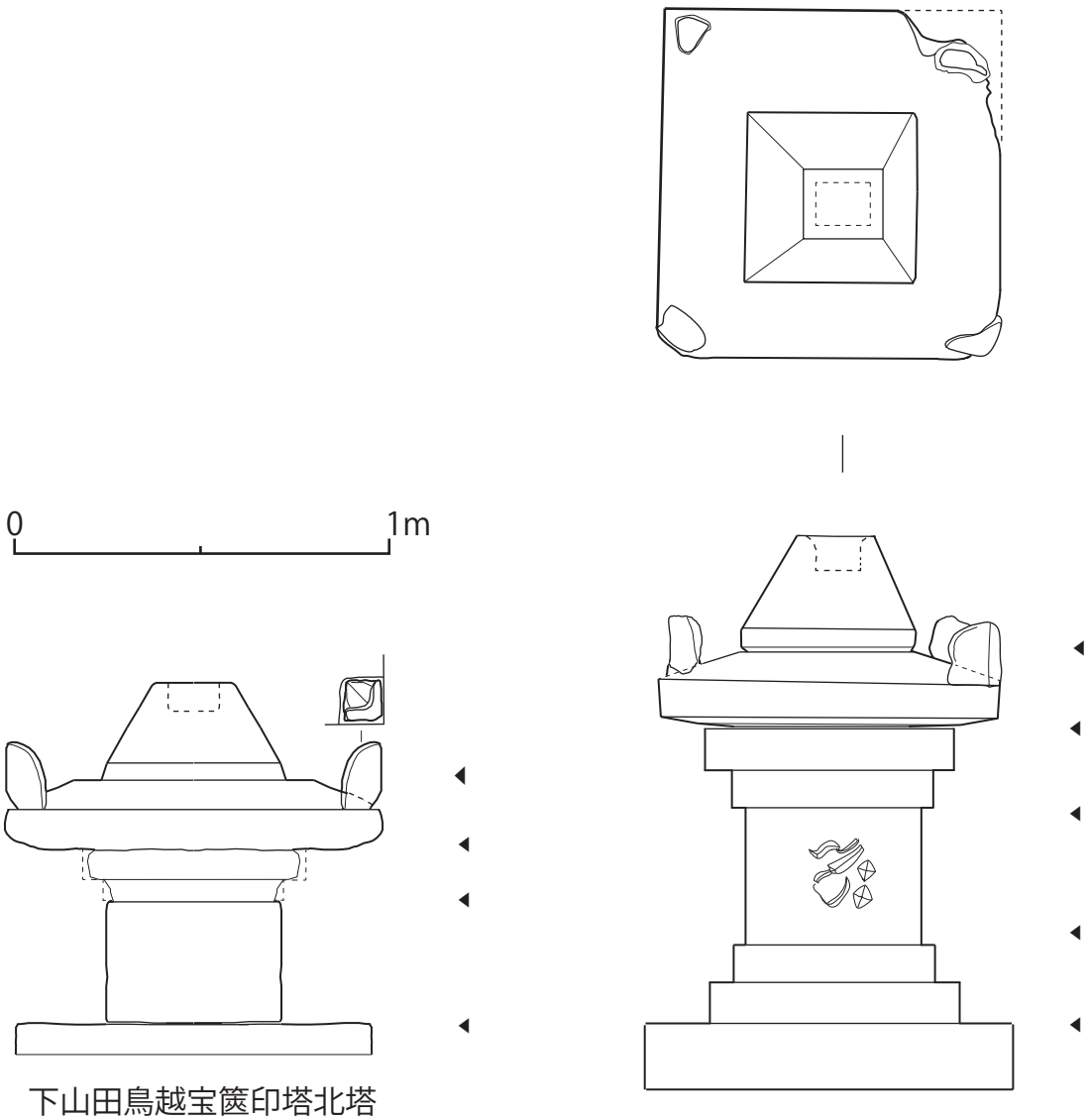


図版七　寺尾野宝篋印塔実測図（S=1/10）



図版八　菊鹿型宝篋印塔編年案（S=1/80）

※金剛峯寺（高野山奥之院金銅製宝篋印塔）の縮尺は任意。
清水磨崖仏宝篋印塔（三大）は報告書より引用。

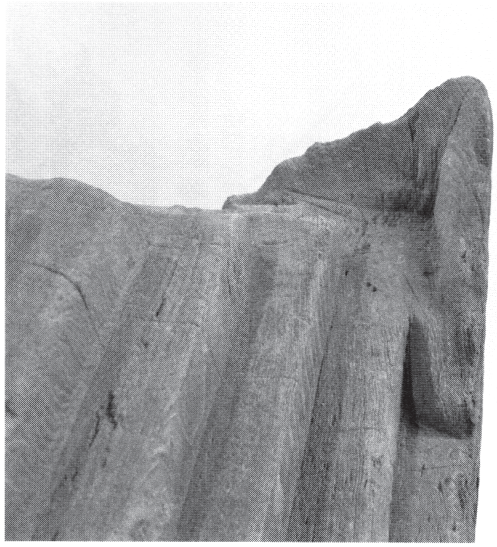


下山田鳥越宝篋印塔北塔

下山田鳥越宝篋印塔南塔

図版九　下山田鳥越宝篋印塔　実測図（S=1/10）

和歌山県金剛峯寺高野山奥之院金銅製
宝篋印塔（弘安 10 年（1287）銘）
高野山霊宝館 HP より引用



5-2. いわき市金光寺木製塔　細部

5-1. いわき市金光寺木製塔

福島県いわき市金光寺木造宝篋印塔
（文保 2 年（1318））
藤澤典彦・狭川真一 2017 から引用

鹿児島県南九州市下山田鳥越宝篋印塔

熊本県山鹿市川西の宝篋印塔
正和三年（1314）銘

図版十一　菊鹿型宝篋印塔の祖型イメージ（隅飾りの比較）

三郎丸吾平神社宝篋印塔

参考：四面像（北周）天和６年（571）銘

『大阪市立美術館蔵品図録Ⅶ』より引用

元吾平神社宝篋印塔

元泉水宝篋印塔

図版十二　石塔各種　画像

菊池一族解體新章　巻ノ四

発行日　令和６年　月　日
編集・発行　菊池市教育委員会　菊池文化研究所
熊本県菊池市隈府 888
TEL 0968-41-7515
印刷・製本　㈾ 橋本印刷

北
西
東
南
今村
赤星村
出田村